二人の誓いは運命を変える

坂本パン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本来の物語ではあり得なかった繋がり。とある人物に憑依し、混ざりあった人格は物語を少しずつ変えていく。

そうして生まれた、二人の誓いは運命に影響を与えていく。

ハーメルン初投稿です。

作品のテーマは、美遊兄士郎にもっと出番を作りたいという物です。ただ、違和感が無いように進めていく為に、物語の主人公は主に言峰綺礼と美遊兄士郎の二人です。序章の雪下の誓い編は主に言峰視点の話になります。

※Ｆａｔｅ初心者です。調べながら書いてはいますが、厳しい意見や指摘は控えてもらえると嬉しいです。

※漫画「Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤドライ!!」の１１巻までの内容を参考に作成しています。

※まだ本家様が完結していないので、書くとしてもアンジェリカ撃破くらいまででこの二次創作は完結します。

目次

序章　雪下の誓い編

［第一話］始まり　1
［第二話］煩悶　5
［第三話］正義の味方には、至らず　8
［第四話］選択の時　11
［第五話］借り物の聖杯戦争　13
［第六話］兄妹　18
［第七話］もう一つの誓い　23
［第八話］残った者　27

Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ編

［第九話］そして平行世界へと　31
［第十話］カード回収の始まり　35
［第十一話］必要なもの　39
［第十二話］クラス・キャスター　43
［第十三話］クラス・セイバー　46
［第十四話］クラス・アサシン　49
［第十五話］クラス・バーサーカー　53

Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ　ツヴァイ！編

［第十六話］魔法少女は再び　58
［第十七話］クロの少女　61
［第十八話］少女はクロエに　65
［第十九話］前任者　69
［第二十話］変わりゆく体　74

［第二十一話］イリヤと過ごした一日 ―――― 78
［第二十二話］クロエと過ごした一日 ―――― 82
［第二十三話］後悔の形 ―――― 86
［第二十四話］二枚目のアーチャー ―――― 90
［第二十五話］運命 ―――― 95
Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ　ドライ!!編
［第二十六話］交わり始める世界線 ―――― 99
［第二十七話］エミヤシロウ ―――― 107
［第二十八話］マトウサクラ ―――― 114

序章　雪下の誓い編

［第一話］始まり

「さぁ、選択せよ。衛宮士郎」
君の運命を変えてみせてくれ。
「傍観か敵対か、…いずれにせよ君の背から正義は崩れ落ちるだろう」
私を、感動させてくれ!!!!

体感的には、もう１００年以上前の話になる。
私がただの愚かな魔術師。
戒斗・グラスだった時の事。
「戒斗、鍛錬はこのくらいにして晩ご飯にしましょ？」
「うん、ママ。今日のご飯は何かな～」
「ふふっ、お楽しみよ」
暖かな団欒の記憶。
私の両親は魔術師だった。
だが、普通の魔術師なら目指すであろう根源への探求を彼らに見た記憶は私には無い。おそらく、私が生まれたからなのだろう。彼らは、子供を育て普通の暮らしを営む事を選んだ。
私は愛情を一心に受けて健やかに育った。
魔術回路の継承と、魔術の鍛錬はしていたがそれも苛烈な物ではなく、あくまで有事の際の保険と護身程度の物だった。
幸せだった。何気ない日常に、慎ましやかな生活。
それ以上を望む事も無かった。
だが、不変の事象など無く命には限りがある。
父と母は、私がまだ１０歳の時に亡くなった。何が原因だったのかは、当時の私には分からなかった。ただ、その死のみが事実として降り掛かった。
悲嘆に暮れた私は両親との繋がりと、そして何か夢中になれる物を

求めた。
「魔術回路…ぼくに残った、パパとママとの繋がり…」
その日から、私は魔術の研鑽に身を費やした。
魔術の研究を続けていれば、家族の蘇生すらも可能になるのではと幼い私の心にはそんな淡い思いもあった。
だが、グレン家は歴史の長い魔術師の家系でもなく、私自身も稀代の天才だった訳でもない。だからグレン家が得意としたある魔術に目を付けた。
置換魔術。
今覚えば、私は生き急いでいたのかもしれない。
研究が記された文書の中で、私は一番手っ取り早そうな手法を選んだ。
私は置換魔術を使い、今の自分と未来の自分の中身を置き換えた。
結果、私は未来の自分自身の魔術回路と老成した技能の全てを手に入れた。
だが。
その代わりに私は失った。
感動する、という感情を。
何をしてもどこか空虚に感じられ、心を揺すぶられる事が無くなってしまった。
「これが報いか。不相応な事をした…」
何より辛かったのは、過去の両親の記憶すらもどこか安っぽく、価値が無いように色褪せてしまった事だった。
幸福な思い出は記憶の中で時間と共に美化されていくものだ。
だが私の思い出は時間が経つたびに、本当に自分は幸せだったのだろうか?と自分自身でその価値を貶めて汚していく。
彼らとの繋がりを感じる為に鍛錬を始めたはずだったのに、今やその思い出にはなんの温もりも感じない。
それは両親を愛した私にとっては、苦痛であり耐えられないものであった。
その後、余命はひたすらに魔力を貯める事と置換魔術の修練に費や

した。
一つの可能性。私が失った感情を取り戻す方法。平行世界への私自身に乗り移るという道。
たかだか数十年、私の人生二回分の研鑽では、第二魔法に近しい魔術にたどり着く事が不可能なのは分かっていた。
だから置換する私という存在の定義から、肉体、魔術回路、その技能を切り捨て、記憶と自我のみを自己として定義し、置換する魔術を組み上げた。
本来は、平行世界の自分自身への置換を可能とする魔術式の開発が理想だったが、私の生涯だけでは足りないようだ。
寿命で命の灯火が消える寸前、私は不完全なまま術式を起動させた。
それはつまり、私の心を取り戻す為に見知らぬ人物の人生を乗っ取る事を意味する。
こんな事をしようとしているが、私の感性は魔術師というより一般人に近い。そう育てられた。
罪の意識が無かったわけじゃない。
ただ、私はかの日の陽だまりに戻りたかった。その為に、平行世界の誰かを犠牲にする事を選択した。
そんな俺が、美味しい思いをしようなんて烏滸がましい事だったのかもしれない。
意識の置換は、部分的には成功した。
結果として私の自我は並行世界の誰かに干渉した。
だが憑依した人物と、私の自我は入れ替わるのではなく混ざり合ってしまった。
心のなにかが欠損している。そんな繋がりが彼との置換に繋がったのかもしれない。
私は感動する心を再び感じ取る事が出来るようになった。
だが私が繋がった人物は、どうしようもなく破綻していた。
彼／私は、生まれながらに善よりも悪を愛し、他人の苦痛に喜び(感動)を感じた。

名を、言峰綺礼（ことみねきれい）。

その後の私の生涯は、戒斗・グレンの善性と、言峰綺礼の悪性の板挟みに苦しめられる事となる。

これは、そんな罪深い私の物語だ。

［第二話］煩悶

こうして、もう一つの生にしがみついた私の人生は始まった。
今の私は、戒斗・グラスであり言峰綺礼である。二つの自我に境目は無く、どちらかが意識を支配しているという訳ではない。
万人が美しいと感じるものを美しいとは思えるようになった。
だが、心は揺さぶるには足りなかった。
善性よりも、悪性のものに私は強く魅力を感じる。
私が混じり合った私は、一言で語るならばマトモな人間に近づいた。
あくまで、以前に比べればではあるが。
良き事にも感動するが、悪しき事にはもっと感動する。
それが私の歪み。私はこの両極端の性質に挟まれながら人生を送っている。
「綺礼、見事な技のキレだな」
「光栄です、我が父よ」
今生の父、言峰璃正（ことみねりせい）。彼は聖堂協会の司祭で、そして信心深い人だった。
私は彼と幼少の頃から、聖地巡礼に同伴した。代行者としての訓練を積み、鍛錬を重ねた。
そうして自分を苦しめる煩悶を鎮めようとした。
ある時には、妻を娶った。
クラウディア・オルテンシア。
二年程生活は続いた。私は彼女を愛した。子供も成した。
そこには確かに幸せがあった。
女を愛し、子を授かった経験の無い私には大きな経験ではあった。
しかし、その幸せはかつてどこかで感じたものよりも小さなものだった。
私の胸に去来した思い、それは、
「あぁ、こんなものなのかーー」
そんな、どこか達観したものだった。

「私には、お前を本気では愛せなかった。…済まない」
「いいえ。貴方はわたしを愛しています」
そう呟いて、彼女は自身へ刃を突き立て命を絶とうとした。
「ほら。貴方、泣いているもの」
私は刃が刺さる前に、彼女からナイフを奪い取った。
自分でも何故そうしたのかは分からなかった。
「…何をしているのだ、私は」
「やっぱり、優しいのね」
困惑している私を見つめる彼女は、どこか嬉しそうだった。
この気持ちは打ち明けるべきではないのかもしれない。
だが、私は知らず知らずの内に追い詰められていたのかもしれない。
気が付いた時には、口に出してしまった。
「私は、生きて良いのか」
私は、私であって私ではない。
そうして生まれた私は善なる者では無かった。
「それが、貴方なのよ。矛盾して、闇を抱えて、でも人並みに優しくて。そんな貴方を、私は愛しています」
彼女が選んだもの。
それは許しであり、その根底にあったものは愛だった…。
それから一週間と経たずに彼女は命を落とすことになる。元々そういう余命のない人物を選んだのだ。
彼女の自殺を止めた所で、彼女の死という結末は大きくは変わらなかった。
私は自身の二面性を受け入れ、生きていく事を選んだ。
彼女はそう、望んだから。

私はその後すぐに、冬木協会にその身を置いた。
与えられた役割は監視という名の傍観であった。
協会はこの『冷たい安寧』の時代に意義と威信を失い、この身も形

骸と化した。
私に出来る事は多くは無い。
街を飲み込んだクレーターの中央に工房を構えたエインズワース。
本物の奇跡(聖杯)を手に入れた衛宮切嗣。
壊滅した間桐家の娘。
せいぜいがそれらの監視だけが私に出来る事だ。
今、私の小さな楽しみと言えば二つ。
手慰みに始めたラーメン屋。
そして、衛宮切嗣の養子。衛宮士郎との邂逅だった。

[第三話] 正義の味方には、至らず

～土郎ｓｉｄｅ～

切嗣は眠るように息を引き取った。

それから少し後、俺が魔術の鍛錬をしていたある日の夜。

「シロウ、玄関に人が来てる」

土蔵に美遊がやってきて、そう言った。

「こんな時間に？」

もうすでに夜も遅い。こんな時間に人が来るなんて普通には考えにくい。

切嗣の言葉が脳裏をよぎる。

僕たちのような奇跡を奪い取ろうとする者

そんな者が他にもいるという事。

切嗣のいないこの状況で訪れる者なんて嫌な予感しかしない。

屋敷の警報は鳴っていないから、今のところ敵意が無い事は分かるが…。

念の為メジャーをポケットに入れて、俺は立ち上がった。

まだ強化魔術も上手く使いこなせていないが、無いよりもマシだろう。

「美遊、屋敷に戻ってろ。俺が呼ぶまで、出てきちゃ駄目だぞ」

「うん…」

玄関先に立っていたのは神父の司祭服を来た人物だった。

けど正直、どこか胡散臭さを否めない。

俺は余計に警戒を強め話し掛けた。

「あんた、誰だ」

「私の名前は言峰綺礼。夜分遅くに失礼する」

「こんな時間になんの用だ」

俺はポケットの中身を握りしめる。

「そう邪険にするな。私は警告に来ただけだ。魔術の鍛錬をするのも結構だが、屋敷の結界と隠蔽はもっと強力にするべきだろう。朔月（さかつき）

美遊(みゅ)を守りたいのならな」
「お前、やっぱり！」
とっさにエセ神父から、距離を取りメジャーに強化魔術を施した。
不安だったが、一発で成功してくれて良かった…。
「確かに私は朔月美遊の存在は認知しているが、それを奪い取ろうとする者では無い。ただの監視役だ」
「そんな事、信じられるか！」
男は、分かりやすくため息をついた。
「その気になれば、未熟な魔術師である君を殺める事などたやすい。私と敵対した所で君に利点は無い。それに工房の結界も反応していないのならば、敵意が無い事は分かるのではないかね？」
「それは…そうだが」
それから俺たちはいくつか問答を交わし、本当にこの神父に敵意や悪意のたぐいが無い事が分かった。
彼から協会の存在や、俺が切嗣から聞いた事の無い様々な魔術の知識や鍛錬の方法を聞かされた。
それに切嗣の亡くなった今、学校や家の権利に関して俺の年齢では出来ない事の代理人や名義人にもなってくれた。
時には、言峰の経営してるというラーメン屋に行ったりもした。
「なぁ、言峰」
「なんだ、少年」
「なんでここには麻婆しか無いんだ！ラーメン屋じゃなかったのか！」
「私の趣味だが」
「世話になってる礼に、美遊にお土産でも買ってこうかと思ったけど…こんなん食わせられないぞ！麻婆しか見えないぞ」
「麺なぞ飾りだ」
「あーもう！あんたにも料理を教えるから、もっとマトモな物を作ってくれ」
それからも言峰との付き合いは続き、彼の料理の癖はだいぶマシになった。

美遊と俺、そして言峰。しばらくは平和に時が過ぎた。
気が付けば、街を飲み込んだ闇の発生、そして美遊を引き取ってから5年が過ぎた。
だが、俺は迷っていた。
美遊はずいぶんと人間らしくなった。なってしまった。
切嗣のように道具として扱うこともできず、かと言って完全に人の子として育てることもできず。
俺は、どうしたいのだろう。
どうすれば良いのだろうか…？
～士郎ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

［第四話］選択の時

衛宮士郎との邂逅から5年。
彼の生活と成長の助力をしたのは、全くの善意というわけでは無い。確かに、個人的な心情もあるがそれ以上に衛宮士郎の存在の仕方には多いに興味を持ったからだ。
養父、衛宮切嗣に救われた子供。そして、その正義に憧れた少年は抜け殻の心を、正義を真似る事で埋めた。
歪（いびつ）、けれど純粋。破綻しているその精神性にどこかシンパシーを感じていた。
そして、そんな正義の味方が万能の願望機をどのように使うのか。全てを救いたいと願った男を受け継いだ者が、全を救う為に一を切り捨てるのだろうか？
私の心には、そんな仄暗い愉悦に似た期待があった。
どうやら、衛宮士郎は朔月美遊を人間として、家族として扱う事に決めたようだ。
だが、彼女を隠匿するのではなく、人間に堕とすのならば聖杯を求めるエインズワース家との対立は避けられないだろう。
第5次聖杯戦争の時も近いかもしれない。
時は止まらない。

「…気がついたか」
朔月美遊はエインズワースに連れていかれ、その際に負傷した衛宮士郎を協会に連れていき治療した。
「言峰か…」
「あまり動かない方が良い。痛みが酷くなるぞ」
治療は完璧だが、傷が無かった事になるわけでは無い。痛みに顔を歪める少年を留めた。
「治療には感謝してる。だが、俺はもう行かないと…」
「どこへ行こうと言うのかな。敵の情報も、工房の場所も分からぬ状

態ではそれすらままならないだろう」
　この街に存在する魔術師。私は、彼にそういった事は教えていない。彼がその工房の事など知る由もない。
「あんた、ジュリアンが美遊を狙ってたのを知っていたのか？」
　俯き、彼はそう呟いた。
「私の監視対象には、あの少年も含まれる。当然、彼らが願望機を望んでいる事も承知だ」
　私がそれを伝えなかった事。彼は、どこかそれが心外であったかのように苦い顔をした。
「ならなんで教えてくれなかったんだ！」
　衛宮士郎にしては珍しく、怒気を振りまいている。もっともな感情ではあるだろう。
　私は衛宮士郎と朔月美遊、二人の親の真似事はしてきた。だが、本当の親というわけでも無い。そのつもりも無い。
「言っただろう、私はただの監視役に過ぎないと。君の敵になりうる存在だからと、理由も無くおいそれと魔術師の情報を流すのは公平ではなかろう。私が朔月美遊の所在を知りながらも、エインズワースを含むどこにも報告していないのと同じ事だ」
「俺は、どうしたら良いんだ」
　これを伝えれば、彼は間違いなく戦いの中に身を置くことになるだろう。だが、私は期待した。その先にある未来を、正義と悪逆の相反する者の行く末を。
「君には、識る権利が与えられた。もう関係者も同然だからな。朔月美遊の所在、エインズワースの工房並びにその目的、そして恐らくもうすぐ起きるであろう聖杯戦争。その全てを教えよう」
　少年には酷な選択だろう。しかし、立ち向かわなければ何も得ることは出来ない。
「さぁ、選択せよ。衛宮士郎。傍観か敵対か、…いずれにせよ君の背から正義は崩れ落ちるだろう」

［第五話］借り物の聖杯戦争

～士郎ｓｉｄｅ～

美遊が連れ去られてから、一ヶ月。

俺はまだ、クレーターの中央に存在するエインズワースの工房。その結界を破れないままでいた。

「言峰に貰った黒鍵も効果無し、か」

言峰は情報や道具は融通してくれているが、直接的な支援はしてくれない。それは彼の立場上出来ないらしい。

「美遊…今頃なにを…」

胸の内に焦燥を抱えながら、帰宅する。無茶をし続けても、身体が持たない…。

その時、声がかけられた。

「先輩？」

「桜、どうしてここに…？」

俺の、最後の日常である彼女がいた。

「に…逃げろ桜…ッ!!」

あぁ。どうしてこんな事になったのか。

間桐桜。彼女も聖杯戦争の関係者で。だけれど、俺を護ろうと立ち上がった。

俺は、それすらも今失おうとしている。

「セン…パイ…」

彼女の心臓をめがけて、奴の腕が伸びる。

このままでは間に合わない。

身体強化を限定的、素早く両脚に発動する。

桜の手を取り、その体を引く。だが、アサシンの攻撃を回避する程に距離を取る時間は無い。

その時、桜の手に握られたカード。曰く、どの英霊にも繋がっていない屑カード。

俺はそのカードから、なぜか目を離せなかった。
そして脳裏には、場違いにもいつか言峰と交わした会話がフラッシュバックしていた

「なぁ、言峰には家族はいないのか？」
それはふとした瞬間に思い浮かんだ疑問だった。彼から、その手の話題を聞いたことが無かったからだ。
「妻と娘がいた…それだけだ」
そう答えた彼の顔は、それまでに見たことが無いほどに苦々しいものだった。
「いた、って今はどうなったんだよ？」
言峰が自身の事を語る機会は少なかった。俺は、彼がどうしてそこまで苦しそうなのか、その訳を知りたいと思った。
「妻は、…私が殺した。娘はまだ赤子の頃に教会に預けたのでな、もうずっと顔も見ていない」
場を沈黙が満たす。
「どうした？私を非難しないのかね、正義の味方」
そう言いニヒルな笑みを浮かべる彼は、罰せられるのを待つ罪人のように厳かだった。
思えばこの時に初めて、俺は言峰綺礼という人間の闇を見たのかもしれない。
「俺は…非難なんてしないさ。少なくとも、何年も一緒に過ごしてる俺からは、あんたは理由もなくそんな事をするような人間には見えない」
「……フッ、そうか」
淡白な反応とは裏腹に、彼はそう言われた事が少し嬉しそうだった。
「少年よ。助けた者が女なら殺すな。愛した者が命を落とす瞬間は、中々に応えるぞ」
「…肝に、銘じておくよ」

何だって良い。誰だって良い。力を貸せ。その代わりに俺の全部を差し出す。
だから、これは祈りではなく。もっと独善的で、矮小で。
ただ、自分の愛した大切な者たちを守りたい。
そんな自分に向けた、『誓い』だ。
そうして、俺は彼(英霊エミヤ)と繋がった。
桜に襲い来るアサシンの触手を切り払う。
俺の手には、干将・莫耶。分かち難い、一対の夫婦剣。それが握られていた。
この力の使い方が分かる。彼(エミヤ)の戦い方が流れ込んでくる。
「どう…して？先輩のそのカードは、どの英霊にも確かに繋がっていなかったのに」
「繋げやがったのか。隠し持っていたんだな、何か英霊に由来する遺物を…」
アサシンは、ずるいじゃないかと何度も何度もブツブツと呻いている。
「お前さ、暗殺者向いてないよ」
「オマエモボクヲォ…バカニスルノカァァァァァ!!!!!」
冷静さを欠いた男が、襲い来る。
だが、俺のすべきことはすでに定まった。
「投影開始(トレース・オン)――！」

アサシンとは思えない巨躯になった男へと次々に干将・莫耶を突き刺す。
「弾けろ」
突き刺した刃を巨大化(オーバーエッジ)し、中の本体への致命傷を狙う。
「ギィガァァァァァ!!!!」
だが、まだ吠えるだけの体力があるようだ。タフなやつだ。

「いいだろう、それなら…消し飛ばしてやる。跡形もなく」
彼が使い慣れた弓と矢を投影し、番える。
そうして引き絞った時。
「先輩っ！」
桜が俺を呼んだ。
俺はその瞬間、番えた矢を下ろした。
別に、今更桜の兄を殺す事を躊躇したわけではない。ただ、矢を穿つ必要が無くなっただけだ。
「桜…ありがとう」
そうして、下ろした矢を後ろへと突き出した。
「ナンで…!?ドウシて…気付いた…!?」
ズブリと、アサシンの腹を矢が貫いていた。
簡単な事だ。桜が俺を呼んだ時、俺は桜の目を見た。彼女の瞳に映る、アサシンの姿を。
気配は感じなかった。だが、アーチャーたるエミヤの視力をもってすれば、その程度が捉えられない訳は無かった。
実際の所、桜が声をかけてくれなければ地に伏せていたのは俺の方だったかもしれない。
そして、桜の兄だった哀れな人形に俺はとどめを刺した。

「先輩…」
不安そうに瞳を揺らす彼女に、伸ばしかけた手を下ろす。
剣を握る選択をした俺が、彼女の手を取る事はもう出来ない。
俺は戦いに身を置く事にしたのだ。桜と生きる道よりも、妹を助ける道を選んだのだ。
「桜、俺は戦うよ。この身が尽きる最後まで。そして、絶対に美遊を助ける」
「どうか、お気をつけて…」
「…あぁ」
涙を流す彼女を背に、俺は歩きだした。

「待ってますから…ずっと！だから、きっと美遊ちゃんと一緒に帰ってきてくださいね！」

美遊を助けたその先。桜と一緒に未来を歩める時は来るのだろうか。

その時、俺は…。

「必ず戻ってくる、桜…」

～士郎ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

［第六話］兄妹

衛宮士郎はその後も破竹の勢いで、次々に襲い来る人形を返り討ちにした。
アサシン。
キャスター。
ライダー。
ランサー。
バーサーカー。
そして、セイバー。
「見事だ衛宮士郎。六人の敵を倒し、七枚のカードがそろった。此度の聖杯戦争…君が勝者だ」
ボロボロになった少年は、それでも意思を枯らさなかった。
「言峰…」
「七枚のカードを持って、妹を迎えに行くが良い。間桐桜に関しては気にせずとも良い。こちらで保護して、今は身を隠している」
「感謝する…」
「待て、私も同行しよう」
「…勝手にしてくれ」
柳洞寺、聖杯を降臨させる場所へと向かう衛宮士郎に付いていく。
彼の最後の選択。それは果たして、どのような味なのだろうか…？

全を救う為に一を犠牲にする事を選んだエインズワース。
養父の願いを捨て、たった一人の救済を願った衛宮士郎。
私にとっては、どちらも幼稚で、尊く、そして美しいものだ。
聖杯戦争の勝者は、そして願った。
「――我、聖杯に願う。美遊がもう苦しまなくていい世界になりますように。やさしい人たちに出会って…笑いあえる友達を作って…あたたかで、ささやかな――幸せをつかめますように」
「フフフ。ハハハッ！ハッハッハッハッハッハッ!!!!!!」

なかば予想のついていた願いではあったが、私は笑いを抑えられなかった。
「何がそんなにおかしい？言峰」
衛宮士郎は妹の手を握ったまま、こちらを尻目に眉をひそめた。
「いや、なに。その選択を貶したかった訳ではない。君は自らの信念に準じた。正義に憧れた少年はその思いを捨て、妹の為に世界を犠牲にする事すら厭わなかった。世界にとっては最低の悪でも、一人の人間としてはそれは善だ。その矛盾、葛藤、選択。実に素晴らしい、甘美な物語だった」
「あんたが本当に味方だったのかどうか、疑わしくなるよ」
彼は私の発言を聞いて、私に対して呆れたような、疑うような、そんな視線を向けている。
確かに、彼から見れば私には協力する理由が乏しいかもしれない。私の楽しみの為にこの聖杯を巡る戦いを眺めるのであれば、彼に身入れする必要は無い。
私が協力するのは…個人的なものも含まれる。
「……衛宮士郎。君には随分と楽しませてもらった。私はただ観客席で眺めているだけの傍観者だ。だが、これだけのものを見せられては、代価を払わなければ観客として失格だろう」
誤魔化すように、言葉を紡ぐ。
「あんた…」
「朔月美遊に寄り添ってやりたまえ。露払いは私がやってやろう」
聖杯が何を成そうとしているか？私には分かる。
衛宮士郎の願いは、終わりゆくこの世界では果たされない。なればこそ、願望機は別の世界への道を開くだろう。私自身が平行世界からの影響を身を以て体感している人間だ。本物の聖杯が、その程度の奇跡を起こせぬ訳がない。
「一つだけ、言わせてくれ」
彼はどこか、憑き物が落ちたような表情で言う。
「この子はもう、朔月美遊じゃない。俺の妹、衛宮美遊だ」

抜け殻だった偽物は、どうやら『本当』を始められたようだ。
「…フッ、重々承知した。覚えておこう。もっとも、再び相まみえる事も無かろうがな」
嗚呼。
この少年は、痛ましい程に私に似ていた。
だから私は…。

思考を切り替え、現れた来訪者に私は立ち塞がる。
「そこをどけ、教会の傍観者」
現れた女は、エインズワースからの刺客。
本来の聖杯戦争のアーチャークラス。その英霊の名は、英雄王ギルガメッシュ。間桐桜からはそう聞いている。
英霊に勝てるなどとは思っていない。あくまで、儀式が成るまで時間が稼げればそれで良い。
「残念ながら、今回ばかりはそういうわけにはいかない。越権行為である事は否定出来ないがな」
油断なく、黒鍵を構える。一瞬たりとも、気は抜けない。
「ただの代行者が生身で英雄王の前に前に立ちふさがるなど愚昧極まる」
言葉とは裏腹に、女の発言はどこか空虚なものだった。
思わず、口角が歪に釣り上がる。
ここにも、偽物がいたとはな。
「人形がよく吠える。憤りを感じる心など、有していないだろう?」
「貴様……!」
射出され、襲い来る刀剣の嵐をひたすらに回避する。
回避しきれない物のみを、黒鍵で軌道を逸らすように受け流す。
だが、その僅かな接触であっても黒鍵は耐えられず粉々に粉砕する。当然といえば当然だろう、明らかにこちらの武具とは、格の違う物だ。
「無駄だ。貴様にそれは耐えられぬ」

英雄王を宿した女は、いまだに一歩たりとも動いていない。
対してこちらは、幾つもの手傷を負っている。
手の内をさらせば、もう少しならば奴の気を引けるであろう。
あの宝具の射出にも、目が慣れてきた。
「ムッ…」
黒鍵を投擲する。左右と正面、女に向けて黒鍵は回転しながら迫る。
それと同時に、私自身も間合いを詰める。
「悪あがきをっ!!」
こちらに飛来する刃は、最小限の動きのみで避ける。
倒すには至らない、なれど一矢報いさせてもらう！
肉薄し、私は腕を振り抜いた。
だが手応えは無く、私の拳は空を切っていた。
空間置換。
切り取られたように、私の腕先のみが女の後ろへと飛ばされている。
「グフッ……」
当然空振りした私の隙を見逃さず、女の手に握られた剣が私の腹を突き刺す。
だが、その魔術はよく理解している。
そう使うのは、予測出来ていた。
「Ａｎｆａｎｇ（セット）……」
握りしめていた拳を開くと、バラバラと宝石が落ちる。
「これは…!!」
その直後、十数個の宝石が起爆し爆炎が二人を諸共に呑み込んだ.

「宝石魔術とは、小賢しい真似を」
女の方が爆心地たる宝石に近かったにも関わらず、傷であればこちらのほうがよっぽど深い。
英霊たるその力は、やはり半端なものではないらしい。

「その手の魔術を学ぶ機会があったものでな…」
爆風による熱傷、腹部の刺し傷もジグジグと痛みを増している。そういった類の呪いの魔剣だったのかもしれない。
どちらにせよ、満身創痍であることに変わりはない。
時間は稼げた。だが、術式が成るにはあと一歩足りない。
――Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.
「言峰!!避けろ!!」
声の聞こえた方、振り返り儀式の祭壇を見ればそこには弓を番えた衛宮士郎がいた。
「――偽・螺旋剣(カラドボルグⅡ)!!」
咄嗟に体を捻り、矢の軌道から逸れる。
矢は凄まじい勢いで飛んでいき、女を貫かんとする。
「最後の最後にやってくれるものだ…衛宮士郎」
先の一矢は、英雄王の財宝(盾)により防がれてしまったが、それでも構わない。
儀式はここに完成した。
「Ａｎｆａｎｇ(セット)」
再び、宝石を足元へと落とす。だが、先程のものとは違う魔術式が刻まれている。
すると、床の空間が開き、別の場所へと繋がる。
「空間置換だと!?どこまでもエインズワースをコケにしてくれる!!」
この体では、以前ほどの置換魔術を使う事は出来ない。だが、すでに知識は十分に持っているため、小細工を施せば紐付けられている空間を繋げる事くらいは可能だった。この穴の先は、冬木協会へと繋がっている。
聖杯の術式が完成し、衛宮兄妹が平行世界へと飛ばされるのと、私が空間置換の穴へと飛び込むのはほぼ同じタイミングだった。
「今までありがとう…言峰!」
最後に聞こえた言葉は、衛宮士郎からの感謝だった。

［第七話］もう一つの誓い

「思いの外…手がかかりそうだな、これは」
教会へと戻った私は、先の戦闘で受けた傷の治療を行っていた。
意識はハッキリとしている。だが、単純な切り傷だけという訳でもないのでそれなりに労力を要する。
治療を行いながら、どこか自分が空虚な気持ちに陥っている事に気が付き、驚く。
私は柄にもなく、ノスタルジックな気分に浸っていた。
あの兄妹の親の真似事なぞをしたのは、過去の出来事から来たものだと思っていた。私は意外にも情を抱いていたようだ。
そして、彼が『本当』を始めたように、自分にもそれに似たものがあったのを思い出す。
「クラウディア……」

もう過ぎ去った過去の話ではあるが、あの日の事は鮮明に覚えている。
クラウディアの自害を、私が止めてから数日後の事だ。
私はもう骨と皮ばかりになってしまった彼女を車椅子に乗せ、病院の中庭に出た。彼女が外の景色を見たいと言ったからだ。本当はそれすらも許されるような身体では無かったが、もはや避けられない終わりを前にする彼女を止める事など、私には出来なかった。
「いつもと同じ普通の景色なはずなのに、なんだか今は素敵に見えるわ…貴方」
「あぁ、そうだな…」
どうしようもない、濃密な死の気配がその体には近づいていた。軽く咳をするだけでも、彼女は酷くむせて苦しそうにする。
だが、穏やかな表情で空や花を眺める彼女は、どこか神秘的といってもいい美しさがあった。
あの日以来、私達の中で何かが変わった。

残り少ない時間を無駄にしないように、私は殆どの時間を彼女と過ごした。
愛おしい。
初めて、私はごく自然に彼女の事をそう思った。
なればこそ、彼女がこれ以上苦しまなくてすむように殺してやるべきではないのか。その方が、彼女にとっても良いのではないか。そんな思いが胸を占めていた。
私は素直にその思いを打ち明けた。
けれど、「貴方になら、殺されても良いわ」と微笑むその顔を前に、迷いは増すばかりだった。
妻には可能な限り生きて欲しいと思いながら、その命を絶とうと考える。単に、私は彼女をこの手で殺めたいのではないか?自身の言葉に出来ない疑念に、私は恐怖していた。
「ねぇ、貴方…。私を、殺して…?どちらにせよ、私に先はないから」
「クラウディア…」
どうして、彼女は幸せそうな顔をしているのだろうか。
なぜ、死にゆく間際でもその心は満たされているのか。
「私達は、確かに愛し合っていた。私は貴方を受け入れているわ。だから今、貴方の人生で最大の悪逆を成しましょう?」
彼女はあの日以来、私が愛している事を確信していた。
愛し、愛された妻を自らの手で殺める。確かに、それ以上の悪性なものなどあるだろうか。ましてや、彼女は私のただ一人の理解者でもある。それを、失うなど…。
「貴方はこれから先の人生、今日以上の悪行をする事はないわ。だって、きっと貴方の中の善の部分は今日の事を後悔し続けるはずだから」
クラウディア・オルテンシア。
彼女は、まさに聖女のような女だった。私のために、自己犠牲すら厭わないその精神性。
私はその微笑みに吸い込まれるように、彼女の首に手を伸ばした。
「一つだけ、約束して?」

「…聞こう」
「ふふっ。あなたの愉悦は否定しないけれど、子供には優しく…ね？」
彼女が何故、そう約束させたのか。
私たちの娘に向けたものなのか、それとも自身の報われなかった幼少期に向けたものなのか。
クラウディアの本心は、今も私には分からない。
「…誓おう。この命にかけて、生涯」
「愛しているわ、綺礼」
「ああ、私もだ。クラウディア…」
白い肌に力を込めた指が食い込み、うっ血していく。
その骨は脆く、彼女の首が折れるまでそう時間はかからなかった。
私は動かなくなった彼女を抱きしめ、ただ呆然としていた。
冷たくなっていく彼女の肌に、水滴が落ちる。
こぼれ落ちたのは、私の涙だった。
「ウワァァァァァァァァァァ!!!!!!!!!!!」
男の慟哭が響き渡った。
私の行動は、過ちだったのかもしれない。
だが女との『誓い』は、確かに杭となり私に楔を打ち込んだ。
それはどうしようもなく胸が締め付けられる、しかし温かい。
そんな祝福（呪い）だった。

その後、私はすぐに任務を受け冬木へと飛んだ。
クラウディアとの間に産まれた子供は、教会に預けた。
彼女の面影を残す娘を育てるなど、当時の私には不可能だった。
私は自身の子から逃げた。
衛宮兄妹の面倒をみていたのはその償いという無意識が働いたのかもしれない。
「感傷など…外道にはらしくない事をした」
治療が終わり、寝台へと横になる。
言峰璃正との鍛錬の日々。

クラウディアの献身。
衛宮兄妹との出会い。
それらを経ても、私が真にまっとうな人間になる事はついぞ無かった。
それでも私は、自分が思うように生きる事から逃げる訳にはいかない。
それを否定したり、自身の生を諦める事は私には出来ない。
なぜならそんな事をしてしまえば、私を肯定してくれた彼女の思いを否定する事になるからだ。
彼女との日々を、意味のないものにしない為に。
私は自身の善と悪の両方を愛す、その矛盾に向き合い生きていくしかないのだ。

［第八話］残った者

翌日、傷の癒えた私は自身のラーメン屋に来ていた。
エインズワースに明確な敵対行為を行った今となっては、私も追われる身になるであろう。
教会やこのラーメン屋のような、分かりやすい場所に定住するのは良くないだろう。
今日限りで、この店も閉店となる。
「いやー寒いねぇ…今日はお店は開店してないのかい？」
くたびれたスウェット、パーマがかかった髪、下駄のようなサンダルを履いた中年男がそこにはいた。
「…客か？それとも、私に用か？」
男は軽薄に笑いながら、首を降る。
「そこまで警戒しないでも良いじゃないか。今の所は、昼飯を食べに来ただの客だよ」
「ならば、もてなそう。入るが良い」

「これは、ラーメン…なのかな？」
「麻婆豆腐だが？」
男はまだ一口も食べていないが、既に顔は青ざめ汗を流している。
「先に言っておくが、食べ残しは許さん」
恐る恐る、料理に口をつける中年男。
「ゴフッ!!げほぉっ!!」
むせながらも、男は意外にあっさりと完食しきった。…顔色は悪いが。
「それで、いい加減なんの用件か話したらどうだ？ダリウス・エインズワース」
「ハハッ!!なんだ、気が付いていたのか」
置換魔術にしか特性を持たぬエインズワース。その知と特性は代々まったく変わることがないという。だが、通常の魔術師であれば

魔術刻印を継承した所で、実際の力量は当代の当主によって異なるものだろう。ならば考えられる可能性はそう多くない。
「エインズワース初代当主ダリウス。血統の後継者を概念置換することで完全な個の継承を代々行っている…そんな所だろう？」
「ほう…随分と色々詳しいようだ。まるで体験した事があるかのようだ」
「置換魔術には縁があってね」
「言峰綺礼…君の役割はなんなのかな？魔術協会とは表面上・協定関係にある聖堂教会の神父。だがそれだけではないだろう。なぜ、衛宮士郎の手助けをした？どうしてそこまで置換魔術に詳しい？…君は何者だ？」
「……」
「沈黙か。それも良かろう、だがそれでは納得しない者もこちらにはいるのでね。少々、痛めつけさせてもらおう」
その時、ダリウスが取り出したカードから爆風が生じ、私を店の外へと押し出した

「人間にしては粘るものだね。君も一門の武人という事かな」
「はぁ、はぁ…」
ダリウスの使う、わけの分からぬカードの攻撃により私はボロボロになっていた。
こちらの物理的な攻撃は一切通じない。体術、黒鍵、宝石魔術。それらの全ては奴に効いている感触は無い。
ならば、概念的なもので攻撃するしかないだろう。
「Ａｎｆａｎｇ（セット）……」
宝石を投げ、空間を置換魔術によりデタラメに繋げる。そうして繋がれた空間から布のような物が飛び出し、ダリウスの四肢を拘束する。
「うん？珍しい物を使うね」
拘束に使ったのは、マグダラの聖骸布。男性を拘束することに特化

した概念的魔術礼装。
「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒やす。我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない」
唱えるは洗礼詠唱。物理的な干渉という意味ではほぼ無意味だが、人あらざる者や霊体などへと絶大な効果を発揮する簡易魔術儀式の一つ。
ダリウス・エインズワースが概念置換によりこの世に顕在化しているならば、そのあり方は魂だけの存在と言ってもいいだろう。
「打ち砕かれよ。敗れたもの、老いた者を私が招く。
私に委ね、私に学び、私に従え。
休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」
主への信仰心によって、この儀式はより強固なものとなる。
「装うことなかれ。
許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を」
だがこの儀式を行う時、私の胸に去来するのはいつもただ一人の女の姿だった。
「休息は私の手に。　貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。
永遠の命は、死の中でこそ、与えられる。
ーー許しはここに。受肉した私が誓う」
ただ、祈るように。許しを乞うように。
誓いを守るように。
『ーーーーー〝この魂に憐れみを〟』
「これは…っ!?ぐぅおおおおオオオオオオッ!!!」
ダリウスだった外殻が崩れ、ドロリとした泥のような物の中から少年が現れる。
「…父の概念置換をも破戒するとは、大した信仰心だな。…些事には過ぎねぇがな」
「ジュリアン・エインズワース…か」
「それでたった一度、概念置換を破戒した程度でどうする?」

「ここは、痛み分け…とはいかないかね？」
私は既に途切れそうな意識の中、目線だけは少年から逸らさない。
先の英雄王との戦闘の傷は塞がってはいたが、失った血はそうすぐには戻らない。
今回の戦闘でまた深手と大量の出血をした私には限界が近づいていた。
「気に食わねぇが、良いだろう。ギルガメッシュのカードとやりあったというから、どんな奴かと思ったが俺にとっては有象無象に過ぎなかった」
そうして立ち去っていく少年の背を見て、私はその場に伏し、気を失った。

「…ここは」
意識が戻った時に、私は冬木教会の寝台に横になっていた。
傷の治療がされている。それも通常の医者のようなものではなく、魔術による高度な治療だ。
…黒鍵や宝石は寝台の横にある机に置かれていたが、マグダラの聖骸布は無くなっていた。
枕元を見てみると、そこには一輪の青いアジサイが置かれていた。
「フッ…なんと、まぁ…」
人の縁とは、本当に分からぬものだ。
私はそう独りごちながら、教会から立ち去る準備を始めた。

Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ編

［第九話］そして平行世界へと

眩しい光が止み、瞼を開けた光景はさっきと変わらぬ洞窟のように見える。

だが、周囲をよく見れば…空気というか、何かが今までと違ってる事を感じていた。

何より、言峰と戦っていた女性もいなくなっている。

この場に存在するのは、俺と美遊。その二人だけだった。

「んっ…お兄ちゃん？」

「美遊、大丈夫か？体に変な所とかないか？」

目を覚ました美遊に尋ねる。自分の手を見てみたり、顔をペタペタと触っている様子を見る限り、おかしい所はなさそうだ。

聖杯としての機能を果たしたこの子の体に、どこか影響があるのではないかという心配は無用だったようだ。

「お兄ちゃん、あのあと…どうなったんだろう？」

そう、聖杯に願った〝美遊がもう苦しまなくていい世界になりますように〟という願望がどうなったのか。

本当に、それが現実になったのか。判断材料が無い。

「分からない。取り敢えず、外に出てみようか」

少し不安がる美遊の手を取り、洞窟の外に出る。

そうして程なく俺達は知ることになる。

海が、海岸線が近い。

街にクレーターが、無い。

ここが、平行世界なのだと。

美遊を連れ、何か元の俺達の世界と共通したものがないかと街を見回ってみる事にした。

すると、空に煌めく何かが飛んでいる事に気がつく。
「あれは…？」
強化された視力でそれを捉える。
赤と青の、一見して戦闘に向いてなさそうな服装をした女性が二人。
手には、ステッキのような形をした魔術礼装。おもちゃのような見た目に反し、高度なものらしい。殆ど解析する事も出来なかった。
そして、彼女たちが取り出した物、それは。
「そんな…馬鹿なっ!!」
聖杯戦争に使われていた、あのクラスカードだった。

飛んでいった魔術礼装を追い、俺達は公園へとたどり着いた
「全く、ルヴィア様にも困ったものです。私達にはカードの回収という重要な任務がありますのに」
「その話、詳しく聞かせてくれないか？」
「貴方たちは…」
サファイアと名乗る魔術礼装（カレイドステッキというものなんだとか）は、この街に突如現れたカードを回収する為にやってきた存在らしい。
俺はクラスカードの回収を請け負う代わりに、俺達の生活を保証してくれないかと持ちかけた。
こちらの世界では、後ろ盾が何もない状態だ。今、俺が提供できるものと言えばなかば英霊と化した魔術使いとしての腕のみだ。魔術に見識がある者に庇護を持ちかけるのが手っ取り早いだろう。
「元マスターのルヴィア様次第ではありますが、おそらく大丈夫だと思います。私達カレイドステッキが遣わされたのは、この任務がそう簡単なものではないという事ですから」
ではそれで行こうかと思っていた時、美遊が声を上げた。
「クラスカードの回収、私にも協力させて!!」
「…あなたが私の新たなマスターになってくれるなら、こちらとして

は好都合ですが。よろしいのですか？お兄さん」
　サファイアはこちらへ問いかけてくる。
「良くはないが…」
「私も、お兄ちゃんの力になりたい！サファイアのマスターになれば、私も戦えるようになるんでしょ？もう、お兄ちゃんだけに辛い思いなんて、させたくない！」
「美遊……」
　他ならぬ俺だから分かる。家族の為に何も出来ない、自分の無力感、焦燥。
　美遊が魔術の世界に身を置くのは、正直なところ反対だ。だが、その自己嫌悪を抱えたままではそれがどんな形で噴出するか分からない。
「分かった…。ただし、俺の言うことは聞くこと。危なくなったら、逃げること。約束できるか？美遊」
「うん！お兄ちゃん、ありがとう」
　では早速試しに転身してみましょうかと、サファイアが美遊とマスター登録をする。
　そして、きらびやかな光が止んだ時、美遊の姿は変わっていた。
「なぁ、サファイア…。その破廉恥な格好、どうにかならないのか？」
　美遊も予想外の格好で恥ずかしいのか、モジモジしている。
「魔法少女ですから。仕様です」
「…なんでさ」

　ともかく、俺達はルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトの庇護を受ける事に成功した。
　住居・食料・金銭にとどまらず、戸籍の偽造までしてくれると言うのだから、頭の上がらぬ思いだ。
　ルヴィアが魔術師らしからぬ善人なのを悟った俺は、自分達の正体をあらかた説明する事にした。
　俺達が平行世界からやってきた事。

聖杯戦争に用いられたクラスカードの事。
勝者となった俺は、妹の幸せを聖杯に願った事。
美遊がその聖杯そのものであった事は伝えなかった。彼女が善人であったとしても、その周囲がどうかは分からない。どこからか情報が漏れるかもしれない可能性がある為、その一点のみは伏せた。
「平行世界に、カードを用いた聖杯戦争。おまけに貴方は英霊の力を宿している。色々驚きの事が多すぎて、頭が痛いですわね…」
少し、手に力が入る。一度信頼すると決めた相手ではあるが、自身が研究対象としてホルマリン漬けにされてもおかしくない存在であろうことは察している。
そんな俺の様子を見て、彼女は少し微笑んだ。
「そんなに警戒しなくても平気ですわ。私(わたくし)は、一度した約束をそう簡単に反故にするような人間ではありません」
「そうか、ありがとう。ルヴィア」
おおむね話し合いとカード回収の契約の中身はまとまった。
「戸籍の名前はどうしましょう?衛宮のままではマズイですわね。なんせ、私(わたくし)の屋敷の前がこちらの世界の衛宮士郎の家ですから」
俺は少し悩んだが、こう答えた。
「…じゃあ、言峰。戸籍上は言峰士郎と言峰美遊にしてくれないか?」
こうして、美遊と俺の違う世界での新しい生活が始まった。
この選択が正しいものだったのか、まだ確信は持てない。
後悔はある。
ただ、安らかに眠る美遊の寝顔を見ていると、これで良かったのだと。そう思えた。

［第十話］カード回収の始まり

「貴方達にある複雑な事情は聞いてしまった以上、注意するのも大人げない気もしますが…流石にそれは兄妹としては行き過ぎなのでは？シェロ」
「あはははは……」
　次の日の朝、俺と美遊、そしてルヴィアの三人で朝食をとっているとそうルヴィアに言われた。原因は、俺の膝の上で朝食を頬張っている美遊。
　元々、俺と本当の兄妹になりたいと願ったあの夜以降の美遊は割と甘えん坊だった。
　そこに聖杯としてエインズワースに囚われ孤独だった時間と、俺が美遊を取り戻す為に奮闘した事を昨日ルヴィアと一緒に聞いた事が合わさり、美遊は本当に俺にべったりになってしまった。
　兄としては妹が慕ってくれるのは嬉しい事だし、それに血縁の家族とは死に別れ、まだまだ甘えたい盛りの年頃なのだ。俺にはそんな美遊を諌める気は起きなかった。
「今はまだ、勘弁してくれ。美遊も大人になれば、そのうち兄離れするさ」
「お兄ちゃんから、離れる気はない」
「はぁ。本当に、兄弟愛なのかしら。心配になるわね」
「まぁまぁ…」
　今日の夜には、カードの回収が控えている。そんな風には思えない程に、穏やかな朝だった。

「限定次元反射路形成。鏡界回廊一部反転。接界（ジャンプ）します!!」
　クラスカード回収。それだけを聞けば簡単に聞こえるが、カードを回収する為には、実体化しているその英霊を倒さなければいけないらしい。
　俺はルヴィアが持っていたアーチャーのカードを調べた。それは

間違いなく、俺が使っていたエミヤのカードだった。
また、回収されているもう一枚のカードはクラスがランサー。そして宝具がゲイ・ボルクである事から、クー・フーリンと推測されている。
ここまで聞いた俺は、このカード達が間違いなく俺達の世界から来たものであり、そこに契約されている英雄も変わらない事を確信した。
相手が分かっているのならば、あらかじめ対策を立てるのも可能だ。
「かすった！今かすったよ！」
「接近戦は危険です！まずは距離を取ってください！」
鏡面界に降り立つと既に、先に戦闘を初めている者がいた。だが、どうみてもその少女は美遊とそう変わらない年齢の子供のように見える。
「ルヴィア。あれは？」
「ただの商売敵ですわ。やってしまいなさい。シェロ、美遊」
それで良いのか？サファイアに似たステッキを持っているから、明らかに関係者だとおもうのだが…。
「…取り敢えず早くかたを付けようか。対象はライダー。予定通りいくぞ、美遊」
「うん。お兄ちゃん！」
アーチャーのカードを夢幻召喚（インストール）。もはや、自分自身と言っても過言ではないエミヤの力と繋がる。
「本当に、英霊そのものになる事がそのカードの本来の力なんですわね…」
そう小さく呟くルヴィア。
「投影開始（トレース・オン）」
自身の使い慣れた武具、干将・莫耶を投影する。
ライダー、その真名をメドゥーサ。
この英霊を相手取る時、厄介なのは石化の魔眼（キュベレイ）だろう。だが、普段はその魔眼は眼帯によって封じられている。

それが真名に気が付かれるのを防ぐ為のものなのか、それとも無差別に被害をもたらすのを抑制する為のものなのかは分からない。
だが、こちらが一方的に真名を把握している状況ならば、視覚を封じているのは好都合だ。
「最大出力…散弾(シュロート)!!」
美遊が、小さな魔力砲の塊をショットガンのように撒き散らす。
威力は低くても構わない。ただ、ライダーの聴覚と魔力探査を誤魔化せればそれでいい。
魔力弾に乗じて、干将・莫耶を幾つも投擲する。
「引き合えっ!」
夫婦剣の引き合う性質を利用した攻撃。ライダーは寸での所で気が付いたが、遅い。
なぜなら、それもブラフだからだ。
「うぉおおお!!」
俺自身も、魔力弾に紛れてライダーへと接近していたのだ。
防御は、間に合わない!!
そうして突き出した莫耶は、ライダーの霊核を貫いた。

実体から、カードへと戻ったライダーを回収する。
「ふぅ…初戦は計画通り、か。美遊もよくやったな」
「ん…」
こちらに駆け寄ってきた、美遊の頭を撫でる。
「お……お兄ちゃん!?なんでここに??」
「衛宮君…?あなた…」
後に知ることだが、このカード回収に来たもう一人の魔術師、遠坂凛。そしてカレイドステッキ、ルビーのマスターであるというイリヤスフィールは両名とも、この世界の衛宮士郎を知っている人物だった。
しかも、イリヤスフィールに関してはなんと、この世界の俺の妹らしい。

イリヤスフィールはあわあわと目を回し、ルヴィアと遠坂凛は口論している。
「ややこしい事になったな、こりゃ…」
場を占める混沌とした空間に、俺は思わずため息をついてしまった。

[第十一話] 必要なもの

「確かに、そんな事おいそれと口外する訳にはいかないわね」
「平行世界の、お兄ちゃん？同じだけど、違う存在？うぅ～～？」
「なんか面白い事になってきましたね～」
　鏡面界から帰ってきて、一息ついたみんなに説明をする。
　俺達の事を改めて話した所、反応はそれぞれだ。勿論、ルヴィアに話した内容よりはもっと簡潔に話している。
「あまり詳しくは話せない事もあるが、俺達はクラスカードの知識があって、その回収に協力してる事を分かってくれればそれで良いさ。あと、表向きは俺は衛宮士郎ではなくて、言峰士郎って事になってるからよろしく頼む」
「うん…おに、士郎…さん」
「言峰…って呼びたくないから、士郎って呼ぶわよ。とにかく、あまりその情報を簡単に話さないこと。本当なら信頼出来る人間以外には、話さない方が良いことよ、それ」
「あー、そうだな。話した方が早いかなと思ってな。気をつけるよ、遠坂」
　一通り話し合いが終わったあと、俺はこちらの世界の俺の妹と二人で話をした。
「イリヤスフィール、だったよな？」
　少女は首を振る。
「イリヤでいいよ。お兄ちゃんと同じ顔をした人にそう呼ばれると、距離を取られてるみたいでちょっと傷つく…」
「あぁ、なんかごめんな？今度からはイリヤって呼ぶよ」
　こうやって、他愛の無い会話を交わしていると、確かにこの子が妹というのは何だか、しっくりくるような感じもする。
　俺が繋がった英霊エミヤの影響もあるのかもしれない。彼の生涯ではこの世界の衛宮士郎のように、この子が妹だった可能性もあるからだ。
「イリヤ、よかったら俺の妹の美遊と友達になってくれないか？」

「美遊さんと？うん、私も同じ魔法少女同士、仲良くしたいかも…」
「ぜひお願いするよ。…美遊には、友達がいなかったからな」
「それって…」
　イリヤがそう言いかけた時、俺が美遊に呼ばれた為彼女は開きかけた口を閉じた。
「じゃあ、またな。イリヤ」
「うん。士郎さん」

「お兄ちゃん、イリヤスフィールと何を話してたの？」
「あぁ、もしかしたら美遊の友達になってくれるかと思ってちょっとな。多分、年頃も同じだろ？」
　話を聞いた美遊は、むーっとなんだかむくれている。
「わたしにはお兄ちゃんがいれば、それで良いのに…」
「ははっ、本当に甘えん坊だな美遊は。ただ、この先生きていくのに、ずっとそういうわけにもいかないだろ？それに、美遊に信頼する友達が出来るのは俺の願いでもあるしな」
「んー…お兄ちゃんがそう言うなら」
「無理にとは言わないさ。美遊のペースで良いんだ」
「ルヴィア。美遊はこれから学校に通うことになるんだろ？」
「そうですわね。イリヤスフィールと同じ学校への転入を予定していますわ」
「きっとお前なら、すぐ友達もできるさ」
　その次の日から、美遊は学校に通い始めた。
　その間俺はルヴィアの執事として働いている。これも生活の保証に対する対価の一端ではあるが、労働時間に見合わない程の多額の給与も支払われているため特に不満も無い。
　それに、こちらの世界の衛宮士郎がすぐ近くにいる環境では、カード回収以外で積極的に外出する事が出来ないので手持ち無沙汰にならなくて正直助かっている。
「ふむ……なかなかやりますね…」

「あら、オーギュストが認めるなんて珍しいわね。執事の才能も充分ね、シェロ」
…このままずっと、ルヴィアの専属執事にされるなんて事ないよな？

また今日の夜もカード回収が控えている。
残るカードはキャスター、セイバー、アサシン、バーサーカー。そのなかには、俺が英霊化しても常勝とはいかない手強いクラスカードもある。美遊にも、カードの扱い方を教えるべきだろうか。
そんな事を考えながら支度をしていると、部屋にその美遊が入ってきた。
「どうかしたのか？」
「イリヤスフィールの事なんだけど…あの子が悪い人間じゃないのは分かったよ。でも、あんな遊び半分の気持ちで英霊を打倒できるなんて思えない。あのままじゃ、そのうち後悔する事になる。わたしはイリヤスフィールと共闘するのに反対」
どうやら、今日の学校で何かあったようだ。
だが一見して、突き放すような言葉に聞こえて根底にあるものはイリヤへの心配だ。
「ほんとに立派になったな美遊」
美遊の頭を撫でながら、言葉を続ける。
「正直な所、俺はイリヤが戦うのも、美遊が戦うのだってあまり喜べない。だけど、俺が美遊を助けたように。美遊が俺に力を貸してくれるように。知ってしまったら、見て見ぬ振りなんて出来ない事だってあるだろ？」
「お兄ちゃん…」
「だから、イリヤの決心が固まるまで俺は否定しない。それに、何かあっても俺が守ってみせるさ」
そう宣った俺だが、恥ずかしくもその日のカード回収は惨敗で終わる事となる。

「陣地を整えたキャスターがあそこまで恐ろしい敵だったとはな…」
鏡面界に接界（ジャンプ）した瞬間、集中砲火された俺たちはまたたく間にボロボロにされ逃げ帰った。
「あの魔力反射平面も問題だわ。あれがある限り、こっちの攻撃は届かない。士郎の矢なら貫通できるかもしれないけど、その時間もくれない」
「魔法陣の上まで飛んでいければ戦えると思いますが…」
「あ、そっか。飛んじゃえばよかったんだね」
すると、ふわふわとイリヤは飛び始めた。
何というか、魔術の世界の知識が無い事が逆に強みとなっているようだ。
対抗心を燃やしたルヴィアが、美遊にも飛ぶように言う。
「人は…飛べません」
美遊の返答は、実に夢のないものだった。
やっぱり、もっと絵本とかを読ませたほうが良かったのかもしれないと、改めて思った夜だった。

［第十二話］クラス・キャスター

「それで、美遊は飛べるようになったのか？」
　美遊が空を飛べるようにと、今日は朝早くからルヴィア達は屋敷を空けていた。
　飛ぶ感覚を身につける為に、ヘリから突き落としたと聞いた時は正気を疑った。しかし、やはりカレイドステッキは一級品の魔術礼装であるらしく美遊に怪我は特に無かったようだ。
「美遊はなまじ頭が良いから、物理常識に捕らわれていますわ。魔術師としては理論・体系づけて考えられる点は好ましいけれど、魔法少女としては空想するという思考が足りませんわ」
「確かに、小難しい本ばかり読んでいたからなぁ、美遊は」
　紅茶を差し出しながら、そんな会話を交わす。
　たまたま墜落した所でイリヤと出くわした美遊は、あっさりと飛行に成功した彼女に教えを請うことにしたらしい。今はイリヤの家で、飛行のイメージの元になったアニメを見ている。
「血は繋がってないと聞きましたが、貴方達は本当に良い兄妹なんですわね」
　どうやら、表情に出ていたようだ。そう、俺は嬉しいんだ。カード回収、カレイドステッキ。いまだに非日常的な毎日ではあるが、それでも美遊は人として生きている。
　だからこそ、それを守る為に俺がいるのだと。改めてそう思った。

「複雑な作戦立てても混乱するだけだろうから、役割を単純化するわ。小回りの効くイリヤは陽動と撹乱担当。突破力のある美遊は本命の攻撃担当ね。士郎は地上からの狙撃と、不測の事態に備えて。キャスターの情報は士郎から聞いたけど、魔力反射平面の例もある。こちらの予想外の手札を持っている可能性も否定できないわ」
　遠坂の立てた作戦は、今の所おおむね上手くいっている。
　魔力反射平面の更に上へと飛んだ二人は、挟み撃ちの形を取りつつ

攻撃する。そうして、イリヤの方へと注意が向いた時、美遊がイリヤから借りたランサーのカードを使おうとする。
だがその瞬間、フッとキャスターの体がかき消える。
現れたのは、美遊の真後ろだ。
「ふっ!!」
番えた矢を放ち、その攻撃を弾く。
「ありがとう!お兄ちゃん!!」
「転移魔術、そんなものまで!」
俺の後ろに控えている遠坂とルヴィアは驚いている。
やはり、何もかも計画どおりとはいかないか…。
美遊とイリヤは空中で合流し、今度はイリヤが前へと出た。
「極大の…散弾!!」
イリヤが放った魔力砲は、反射平面に跳ね返り空間を埋め尽くさん限りに拡散。
「弾速最大…狙射(シュート)!!」
そしてその防御の為に動きが止まったキャスターを、美遊が狙い撃つ。
撃ち落とされたキャスターは、地上へと落ちる。
「Ａｎｆａｎｇ(セット)ーー」「Ｚｅｉｃｈｅｎ(サイン)ーー」
放たれた二人の宝石は、爆風と共にキャスターを呑み込んだ。
だが、仕留めきれていない。俺にしか見えていなかったようだが、先程の転移のようにキャスターの姿が爆発の瞬間に消えていた。
「どこだ…!」
俺達の全員が異変に気が付いた時、キャスターの特大の魔法陣が目に入る。
「空間ごと焼き払う気よ!!」
美遊がそれを止めようと一直線に飛ぶ。だが、距離が遠い!それでは間に合わない。
射線上に美遊がいるため、狙撃も出来ない。巻き込んでしまう。どうする…!
「乗って!!」

イリヤが放った砲撃。美遊はそれを足場に、加速した。
そして、美遊の放った刺突は、キャスターの心臓を穿った。
「しかし2枚目で早くもこんなに苦戦するとはね…先が思いやられるわ」
クラスカード、キャスターの回収は完了した。幸いにも、大きな怪我をした者はいなかった。だが、余裕の勝利だったという訳ではない。
イリヤの機転が無ければ、もっと被害は大きなものだった。あの一瞬で、まさか魔力砲を足場にする事を思いつき、実行するとは。あの子の発想は侮れない。

「カードの回収をしたってのに…空間の崩落がずいぶんと遅くない？」
遠坂がそう言った時、ゾワリと悪寒を感じた。
瞬間。自身の身体を捻り、逸らす。
躱したその空間を剣が切り裂いた。
見えていた訳ではない。英霊エミヤが数多の戦場を戦いぬき磨いた、心眼とも呼べる洞察力。それがあったからこそ躱せた一撃だった。
身を翻し、距離を取る。
「クラスカード、セイバー…」
その刃は暗く染まっていたが、間違いようもなくその剣はあの時見た究極の聖剣であった。
「あり得るの？こんなこと…！」
「完全に想定外…ですが現実に起こってしまいました」
二人目の敵、クラスカード・セイバー。アーサー王。
夜はまだ、終わらない。

［第十三話］クラス・セイバー

「クッ…投影開始（トレース・オン）！」

セイバーとの打ち合いは苛烈を極めた。干将・莫耶は何度も砕かれ、そのたびに投影して生み出す。

美遊とイリヤも支援しようと魔力砲を飛ばすが、信じられない程に高密度の黒い魔力の霧により阻まれる。

遠坂とルヴィアの宝石魔術も、セイバーの対魔力を超えるにはランクが足りない。

俺も、剣戟に置いて防御に徹するのならば五分を保てるが、攻めきる事が出来ない。異常とも呼べるセイバーの勘の鋭さに、こちらの攻めは凌がれる。安易にその懐に潜り込めば、切り捨てられるのは俺だろう。

このままでは、既にキャスター戦で消耗しているこちらの不利。元より、この身はアーチャーだ。近接戦闘はセイバーに一歩劣る。この拮抗もいつまで保たせられるか分からない。

状況を打開する為には、もう一人英霊が必要だ。

逡巡するが、そう余裕も無い事に心の中で悪態をつく。

「美遊!!……頼む!!」

良いんだね？

そう言いたげな美遊に、頷いてみせる。

美遊が飛行の特訓をしていた折に、二人で話し合った俺達の奥の手。そう、このカードの本来の使い方。

「――告げる！汝の身は我に、汝の剣は我が手に。

聖杯のよるべに従い、この意この理に従うならば応えよ！

誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者！我は常世総ての悪を敷く者――。

汝三大の言霊を纏う七天！抑止の輪より来たれ、天秤の守り手――！」

通行証（カード）を介した英霊の座への間接参照（アクセス）。

「クラスカード、ライダー…」

クラスに応じた英霊の力の一端を写し取り、自身の存在へ上書きする疑似召喚。
「夢幻召喚(インストール)!!!」
美遊の姿が変わる。多少差異はあるが、その姿は少し前に戦ったライダーそっくりだった。
一度俺は距離を取り、遠坂・ルヴィア・イリヤの三人の前に陣取る。
「士郎、あの力美遊も使えたの!?」
「質問は後にしてくれ！そこを動くなよ、これからセイバーの宝具を誘う！」
「はぁ!?」
混乱する三人を置き去りに、投影を始める。
俺の代わりにセイバーの相手をしている美遊は、変則的な動きで相手を翻弄している。
ライダーであれば、セイバーより敏捷で勝っている。そして、美遊が眼帯を外した。
石化の魔眼(キュベレイ)。完全にセイバーを拘束するには至らなかったようだが、それでも充分だ。
「――偽・螺旋剣(カラドボルグII)!!」
放たれた一矢。
セイバーの鎧は砕け、傷は負わせた。しかし、やはり直撃はしていない。魔眼の影響下にあっても、あの勘の良さによりダメージを軽減されたようだ。
だが、それで良い。負傷させ、追い込んだ。そうすれば、必ず敵は宝具を使用する。
「お兄ちゃん、わたしは信じてるから」
いつの間にか俺の隣に戻ってきていた美遊がそう言う。
「あぁ、任せろ」
作戦の要は俺だ。
致命的な隙を生み出す為に、敢えてセイバーに宝具を打たせる。そして、それを防ぐ事が出来るのは、この場では俺だけだ。
思い浮かべるは、この英霊が持ち得る中で最高の防御力を誇る盾。

セイバーに渦巻く魔力が収束する。
同様に、隣にいる美遊の魔力も高まる。
「――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ…」
「――約束（エクス）された……」
「――真名開放…メドゥーサ…」
三人の魔力が高まり、吹き荒れる。
「熾天覆（ローアイアス）う七つの円環――！」
「勝利の剣（カリバー）ーーー!!!!」
花弁が開き、俺達の前に広がる。
黒い極光が、全てを飲み込まんとする。だが、防ぎきれる。防いでみせる！
「行くよ!!」
天馬に跨がった、彼女の鎖付きの杭が黄金の手綱に変化する。
「騎英（ベルレフォーン）の手綱!!!」
それは流星の如き勢いで聖剣の光を掻き消しながら、セイバーへと突貫した。
幻獣による、攻守ともに最高レベルとされる物理攻撃。
それを食らっては、セイバーといえどひとたまりも無かったようだ。
破壊による煙と、魔力の残滓が収まった時、そこにはセイバーのカードがあった。
「終わった…か」
なんとか俺達は生き延びた。
こうして、長かった夜はひとまず終わりを迎えた。

「ルビー…なんか私、役立たずじゃない!?」
「……大丈夫！イリヤさんには一番魔法少女っぽいというアドバンテージがありますから！」
「今の間はなにーー!?」

［第十四話］クラス・アサシン

次の日、美遊は学校に登校せず、休養するようにとルヴィアに言われた。
当然と言えば当然かもしれない。キャスター、セイバーとの戦闘。
そして、カードの夢幻召喚（インストール）。
まだ十歳の少女には負担であった事は間違いないだろうし、無理は良くない。
だが、普通に執事として働いている俺の姿を見て、美遊も午後から侍女としての仕事をし始めた。
止めようかと思ったが、休んでいた午前中、特に辛そうにしている様子も無かったので本人の意思を尊重する事にした。
「そんな所まで、俺に似なくても良かったのにな」
「何か言った？お兄ちゃん」
「いや、なんでもないよ」
「？」
唐突に、ピピピピピと電子音が鳴る。
「どうしたの、姉さん？」
「今の音…なに？サファイア」
音の正体はサファイアだったらしい。なんでも、カレイドステッキには通信機能もあるらしい。
通信者はルビーもとい、そのマスターのイリヤ。
どうやらイリヤも今日は念の為休養をとったらしいが、暇で暇でしょうがないらしい。
だが、自身から連絡をとってきた割には不器用な会話で、会話があまり続かない。
それを見かねたステッキ達は、テレビ電話を始めるようとする。
美遊は止めようとしたが、間に合わなかった。
「メッ…メイド服ーッ!?しかも士郎さんは執事服だしーーッ!?」
「あらあらまああ…！なんとも良いご趣味をおもちのようで」
大興奮のイリヤ＆ルビー。

「あっこっ…これは違う…っ!!」
「あー…、そういえばこんな格好だったな、俺達」
すっかり忘れていたが、美遊と俺は仕事着としてそれぞれメイド服と執事服を着ている。
なんと言うか、ルヴィアの強い主張によりそうなった。雇用主の希望ならばと、俺も安請け合いしてしまった部分はある。
「ミユさん…今すぐあなたに会いたいわ。うんすごく会いたい。なんて言うか、生で見たい。来て、今すぐ来て！そのまんまの格好で来て!!」
「はっ、はいいっ!?」
イリヤのおかしなテンションに押し切られ、美遊はメイド服のまま隣の家に出向いていった。
後から聞いた話だと、身体を拭いて欲しがったイリヤが裸になり、そのタイミングで学校の同級生が見舞いにくるというドタバタハプニングがあったらしい。
何だかんだと、二人は友人として少しずつ歩めている。
そう安堵していた矢先、その夜のカード回収は俺達の予測を裏切る形で終わる事となる。

「敵を視認！総数…５０以上!!」
「そんな…！」
「なんてインチキ…！軍勢だなんて聞いてないわよ!!」
…抜かった！
カードに契約されている英霊は本来、カード一枚につき一人。
だが、聖杯戦争に用いられるクラスとはそもそも、英雄の一側面を限定的に当てはめる枷のような物。
つまりは、俺が英霊エミヤの力を持ちながら、座に存在している彼とは違う存在であるように。
同じ英霊の名を持った、別人物が召喚される可能性だってあるという事だ。

それを見落とすとは…!!
「か…からだが…うごかない…っ！」
「ちぃ…、毒か！イリヤッ!!」
先程投擲されたナイフ（ダーク）により負傷したイリヤ。その傷自体は小さなものだったが、毒が塗られていたようだ。
隊列から遅れたイリヤに、四方八方から降りそそぐ凶刃。
毒に魔力循環が乱されている今、その身体にルビーの物理保護は機能していない。
一番最初に駆け出した俺よりも、攻撃の方が早い。
絶体絶命。
そう思われた時突然、イリヤの体から膨大な魔力が噴出を始めた。
それは急速に収束を行い、爆発しようとしていた。
「マズイッ!!」
盾（アイアス）は間に合わない。
咄嗟に低ランクの剣を大量に投影し、壁のように地面に突き立てる。
次の瞬間、イリヤから放たれた魔力は辺り一帯を焦土に変えた。

俺が盾代わりに投影した剣、美遊の魔力壁、遠坂とルヴィアの宝石魔術による防御。
各々が持てる手段を講じたおかげで幸いにも、こちらの被害は一番イリヤに近かった俺が多少手傷を負った程度だった。
結果的には、アサシンの軍勢を一網打尽にしカードの回収は完了した。
だが、イリヤは自身が俺に怪我をさせた事にショックを受けたようで、鏡面界から逃げるように抜け出してしまった。
「イリヤ…、君は一体…」
先程の力は、明らかにひとりの人間が許容できる魔力量ではなかった。
ただの人間ではありえない事象。

平行世界の『衛宮士郎』の妹。
それらの情報を考えると浮かび上がる、ひとつの可能性。
「まさか……あの子も聖杯、なのか…？」
俺の胸騒ぎは増すばかりだった。

［第十五話］クラス・バーサーカー

カードの最後の一枚、バーサーカー。その回収に、イリヤは現れなかった。

遠坂が言うには、彼女との奴隷（サーヴァント）契約は解除したらしい。協力を強要していたのは自分の方だし、小学生に戦いの代理をしてもらうなんて元々無理があったのだと。

俺も、その意見には大いに賛成だ。元々あの子が戦う事自体に心の底から賛同していたわけでもない。それに、戦いの世界に身を置くには、イリヤは優しすぎる。

逆に不安なこともある。彼女がアサシンとの戦闘で見せた膨大な魔力。この世界の衛宮士郎の妹であること。

イリヤもまた、逃げられない運命の歯車の中にいるのではないかと。

だが、今は目先の事に集中をするべきだろう。

バーサーカーのカードは手強い。正面切っての戦闘では敵わない相手だ。それに、一定ランクに達しないすべての攻撃を無効化する、宝具そのものと言える肉体。加えて、死亡した時に自動で発動する蘇生能力。

蘇生の回数は分からないが、持てる手は尽くす。だが、カードが回収されると共に鏡面界はどんどん小さくなっている。

今回のバーサーカー戦では、フィールドは殆どビル丸々一個分しかない。ライダーのカードを使うには狭すぎる。

鏡面界に入る前に、俺はアーチャー、美遊はランサーをあらかじめ夢幻召喚（インストール）してから接界（ジャンプ）した。

「ラストバトル…始めるわよ!!」

「刺し穿つ死棘（ゲイ・ボルク）の槍――!!」

心臓を穿ち。

「偽・螺旋剣（カラドボルグII）――!!」

体を抉り取る。
それでも、時間が巻き戻っているかのようにその肉体は蘇る。
「聞いてはいたけれど、なんて能力…！」
「一度撤退よ！次の作戦に行くわ！」
遠坂が屋上の壁を切り取り穴を空ける。
俺達はビルの内部へと駆け出した。
「あの図体なら、ここじゃあ満足に動けないはずよ。少なくとも、時間は稼げる」
「まだ戦えますわね？シェロ、美遊」
「あぁ」「はい！」
ひとつ息をつき、呼吸を整える。
あの巨体を殺しうるに足る別の武具がいる。
セイバーの持つ究極の聖剣は、俺には投影できない。
ならばと脳裏に浮かぶのは、あの時バーサーカー自身が振るっていた斧剣。
「投影（トレース・オン）、開始」
投影するだけでは、俺には使いこなせない。
振るうに必要な筋力、奴の得た経験、技量。
その全てを投影する。
「投影（トリガー・オフ）、装填」
ビルの天井が壊れ、バーサーカーが現れる。
遠坂やルヴィアの声がどこか遠く聞こえる。
ここに、全ての工程は完了した。
「全工程（セット）投影完了（ト）――是・射殺す百頭（ナインライブズ・ブレイドワークス）!!」
迫りくるバーサーカーの拳を上回る神速の連撃で、その体を切り裂く。
だが、それでもまだ終わっていない。体の八割方を失っても、まだその体は復活の兆しを見せている。
「美遊っ!!」
「セイバー、夢幻召喚（インストール）！約束された勝利の剣（エクスカリバー）――!!!」
聖剣の光が蘇りつつある体を消し飛ばし、その余波でビルに大穴が

空いた。
だが、それでもなおバーサーカーは生きていた。
「!?」
声をかける暇すら無い。魔力切れによりセイバーのカードが強制送還された美遊に、その巨躯が襲いかかる。
美遊とバーサーカーの間に割り込むように俺は駆け寄る。
防御のために再び斧剣を投影するが、急造のハリボテでは奴の膂力を殺しきれなかった。
斧剣は真っ二つに折られ、同時にメキメキと体が嫌な音を立てながら俺は吹き飛ばされる。
「お兄ちゃんッ!!」
「ゴホッ!…グッ…」
アーチャーのカードが強制的に排出される。
激痛に苛まれながらも、歯を食い縛り立ち上がろうとする。
「全力の…砲射(フォイア)!!」
その時、砲撃と共に現れたのはイリヤだった。
「凛さんッ!ルヴィアさんッ!」
本来来るはずのなかった増援に驚きながらも、声をかけられた二人はイリヤの意図を瞬時に理解した。
「Ａｎｆａｎｇ(セット)――!」「Ｚｅｉｃｈｅｎ(サイン)――!」
「「獣縛の六枷(グレイプニル)!!」」
宝石魔術により、一時的ではあるがバーサーカーの拘束に成功した。
そして、イリヤは泣きそうな顔でこちらに振り返った。
「わたし――バカだった。何の覚悟もないままただ言われるままに戦ってた。戦ってても…どこか他人事だったんだ。こんなウソみたいな戦いは現実じゃないって…」
「なのに…その『ウソみたいな力』が自分にもあるってわかって…急に…全部が怖くなって…!」
「本当にバカだったのは、逃げ出したことだ!友達を見捨てたままじゃ、前へは進めないから…ッ!」

「イリヤ…」
ああ、本当に。こんな子が、美遊の友達になってくれて良かった。
「受け取れ！イリヤ！君なら使えるはずだ!!」
俺は折れていない左腕でアーチャーのカードを投げ渡した。
受け取ったイリヤは、カードを見つめ言う。
「不思議…今のわたしには、このカードの使い方が分かる」
そして、イリヤから膨大な魔力が迸る。
アサシンの時と同じ現象だが、今回は自分の意思で制御出来ているらしく、暴走する気配は無い。
「アーチャー、夢幻召喚（インストール）」
「投影（トレース・オン）、開始」
「セイバー、限定展開（インクルード）」
イリヤと美遊の手には、それぞれ聖剣が握られている。
「いくよ？美遊」「うん、イリヤ！」
そして振り下ろされた、ふたつの光の奔流。
「「約束された勝利の剣（エクスカリバー）――!!!!!」」
それは今度こそバーサーカーを打ち倒し、任務完遂の狼煙となったのだった。

「すべてのカードを回収完了。これで…コンプリートよ」
鏡面界から帰った俺達は、ぐったりと腰を下ろしていた。
無理もないだろう。まさしく今回の敵は最強と言っても過言では無い相手だった。
とにかく、これでカードを届ければ任務は完了。そう言った遠坂の手から、スウッとカードが奪い取られる。
「ホ――ッホッホッホ!!最後の最後に油断しましたわね！ご安心なさい！カードはすべて私（わたくし）が大師父の元へ届けて差し上げますわーっ！」
「んなあああああッ?!」
いつの間にやら呼ばれていたヘリコプターに乗り、ルヴィアは全てのカードを手にし立ち去ろうとしていた。

「ちょっ、ちょっとルヴィアさんっ!!お兄ちゃん、怪我してるんです!!放っておくんですか!!」
「そちらはちゃんとオーギュストに言付けてありますわッ！安心なさい、美遊！」
そうして高笑いを残して、ルヴィアは去っていった。
遠坂もそれを追って行ってしまう。
俺と美遊、そしてイリヤはその場にポカーンと取り残された。
「ハハッ…最後まで締まらないな…」
ひとまず、戦いの夜は終わりを迎えた。
だがなんとなく、これで俺達の騒がしい関係が終わるとも思えないでいる自分がいた。

Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ　ツヴァイ！編

［第十六話］魔法少女は再び

時が流れるのは早いもので、あの戦いからもうすぐ一ヶ月が経とうとしている。

カード回収は完了したものの、俺達の日常はそんなに変わらなかった。俺と美遊は、相変わらずルヴィアの屋敷に世話になっている。

あのあと、逃走したルヴィアを追って二人は朝まで追いかけっこしていたそうだ。

そんな二人を大師父とやらは見かねたようで、喧嘩っ早いその性格を直してこいと言われ結局は一年間は日本に在留する事に決まったのだとか。

学校の方では、イリヤと美遊はかなり仲が良くなったようだ。

美遊は毎日のように、その日学校であった事を俺に聞かせてくれる。時折、屋敷にやってきたイリヤからも聞いているが、初めの頃は会話すらまともにできなかった美遊だが、最近はクラスにも馴染んできているようだ。

「士郎、あんた病み上がりなんだから無茶は禁物よ」

「はいはい…」

こちらはと言うと、いつの間にやら遠坂もルヴィアの屋敷で働いていた。

俺がしばらく、なかば強制的に休養を取らされていた間に雇われたらしい。

俺が休養を取らされた理由はふたつある。

骨折や傷の治療は遠坂とルヴィアにしてもらったが、二人共治療の魔術は得意ではないらしく傷は治ったものの念の為というのが一つ。

もうひとつは、改めて俺の体を医学的・魔術的に検査した所、筋繊維や骨、魔術回路などが極度の疲労状態であったらしい。先のバーサーカー戦での骨折はその影響もあったようだ。

考えてみれば不思議な事でもない。英霊の力を借り受けるといっても、この体はエーテルで構成されているわけじゃない、生身の人間だ。
度重なる戦闘に、夢幻召喚（インストール）。カード回収に携わった時、あの聖杯戦争からも実際にはそんなに時間も空いていない。
「よくこんな状態で平気な面して戦っていたわね」と、遠坂には呆れられたものだ。
言峰の鍛錬によって鍛えられた俺は、これぐらい問題無い範囲なのだと思い込んでいたが、それを話したらまた呆れられてしまった。
いかに言峰の治療の腕が良かったのか、思わぬところで知った場面だった。
「それと士郎。はい、これ」
そういって遠坂から手渡されたのは、俺がよく着るようなシンプルなデザインのパーカーやレインコート。
「どうしたんだ？これ」
「簡易的な魔術礼装よ。このルヴィアの屋敷に張られてる認識阻害と同系統のものね。それを着てる間は、あなたは衛宮士郎によく似てるだけの別人として認識されるはずよ。まぁ、魔術の心得が無い人間くらいしか騙せないけどね」
何でそんな物を？と聞き返すと、遠坂は少し暗い顔を見せる。
「士郎と美遊が、カードの回収に責任を感じてるのは分かってたわ…あなた達を見てればね。それでも、本来は私とルヴィアの任務だったから、協力に対して感謝の気持ちを込めてね。それに…」
「それに？」
「せっかく困難を乗り越えて、前へ進み始めた兄妹なのよ？報われなきゃ、そんなのってないじゃない」
不思議とその言葉には、重さが込められているように感じた。
「……、遠坂の気持ちは確かに受け取ったよ。正直なところ、こういう魔術は俺は不得手だからな。助かるよ」
特に拒否するような理由も無い。それらは素直に受け取る事にした。

「人が少ないところなら、これで出掛けても大丈夫だから。兄として、ちゃんと美遊を労ってやりなさい」
「ああ、そうだな」

明くる日、遠坂とルヴィアがイリヤと美遊を連れて任務へ向かった。
カードが回収されたことにより、自然に直るはずの地脈がなかなか正常化しない現状の解決に向かったらしい。
俺もついて行こうかと聞いてみたが、今回はカード回収のような戦闘も起きないから、カレイドの魔法少女だけで充分とのことだ。
その筈だったのだが…。
「はじめましてって言うべきなのかしら？よろしくね、もうひとりのお兄ちゃん？」
俺の目の前にはイリヤと同じ顔の、黒い少女がいる。
だが、この子は明らかにイリヤではない…。
「なんでさ…」
思わず、ため息をつかずにはいられなかった。

［第十七話］クロの少女

突然現れた少女は、上機嫌に部屋をうろつき周りながらこちらの様子を伺っている。
「君は、一体何者なんだ？もうひとりのお兄ちゃん（衛宮士郎）って、どうしてそれを…」
少女は唇に手を当てながら、妙に蠱惑的な仕草で話す。
「知っているわ、当然ね。だって、わたしはイリヤなんだから」
自分が平行世界の衛宮士郎である事を知っている人物は、遠坂・ルヴィア、イリヤに美遊（あと人ではないけれど二本のカレイドステッキ）しかいないはずだ。
オーギュストをはじめとする、この屋敷のメイド達も感づいてはいるのかもしれないが、それを漏らすような人間をルヴィアが雇うとも考えにくい。
となると、この女の子は本当に…。
「今日のところは顔合わせで帰るわ。わたしにはわたしの目的があるしね」
こちらが色々と考え込んでいる内に、少女はサッと立ち去ってしまった。
「何だったんだ…」
疑問が絶えない、邂逅だった。

「というわけで…対策会議よ！」
あの謎の少女の出現は、先日の龍穴の拡張時に起きた事故に起因する。落盤で潰れるのを防ぐ為、咄嗟にイリヤがアーチャーのカードを夢幻召喚（インストール）した時、気が付いたらそこにいたらしい。
そして今日、イリヤはその黒イリヤに命を狙われ戦闘。その時は撃退したが、恐らく再び現れるであろう事が予想されている。
「黒イリヤの目的はどうやらイリヤの命…でも、そんな危機的状況なのに当のイリヤは――何故か弱体化してる…と」

「それに、懸念点は他にもある。あれ以来、行方の分からないアーチャーのカード。それに、襲われたイリヤと美遊が見た黒いイリヤ、ああもうややこしいからクロでいいわ。クロの戦い方は…」
「うん…おに、…士郎さんと同じだった」
「投影魔術に、弓兵の力…間違いないと思う…」
実際に戦ったという、イリヤと美遊はそう言う。
「以前に見た英霊の現象の一部？でも、思考力があって会話も可能だった…」
分からない事だらけだ。だが、俺が見た少女は、そう、なんというか。
寂しそうだと、感じたんだ。
「とにかく情報が少なすぎる。こうなった以上、やることはひとつ…黒イリヤこと、クロを捕獲する！」

「行動が的確すぎます！あの黒いイリヤさんてばなんか異常ですよ！」
アーチャーのクラスカードが無い俺は、後ろに下がっているように言われて俺は傍観していた。だがクロはまるで、こちらの手を読んでいるかのような対応力で美遊、遠坂とルヴィアを無力化した。
俺はこの少女と話す必要があると思った。
それにカードが無くても、俺は力を使える。
「ちょ…、士郎!?」
「ここは、俺に任せてくれ」
「ふーん？真打ち登場ってとこかしら」
他の皆を一端下がらせ、俺が前に出る。
「投影開始（トレース・オン）」
彼女が持っているのは、間違いなく干将・莫耶。俺と同じ、エミヤの力だ。
「ふっ!!」
双剣で打ち合う。一合、二合。三合目で彼女の莫耶が折れる。

再び投影し、そしてまた打ち合う。だが、新たに投影した莫耶は先程よりもより真に近い。
「不思議ね…、あなたを見ているとこの英霊（ちから）の使い方が解るわ。頭の中澄み渡るみたいにね」
最初はこちらの方が優勢だった。だが、打ち合う事に彼女の動きは鋭くなり、投影の質も上がっている。
まるで、今までこの力の使い方が分かっていなかったかのように。俺の経験を吸い取るかのように。
「ねぇ、ひとつゲームをしない？」
突然、彼女がそう言い出した。
「わたしが勝ったら、お兄ちゃんはわたしのものになるの。多分、わたしの事を一番理解してくれそうなのは、あなただから」
「…俺が勝ったら？」
「その時は、お兄ちゃんの好きにして？どーんな事でも、受け入れてあ・げ・る」
これは、俺にとって有利な賭けではない。
だがせっかく彼女の方から交渉の席についたのだ。対話の為には、受け入れるほかない。
「良いだろう、ゲームを受ける」
「オーケー。それならわたしもちょっと、本気で行くわ！」
彼女の気配が、背後へと現れる。
これは、一度見たことがある。転移だ。
身を捻り、回避する。
「あらら…、躱されちゃった」
さして焦ってもいない態度で彼女は言う。
「……」
今は辛うじて躱せているが、彼女の技量が同等になれば俺は負ける。
英霊エミヤの力には、転移なんてものは無いからだ。
同じ武技で争っていては勝てない。
ならば僅かながらにも、技量で勝っている内に決着をつけなければ

ならない。
こちらから距離を詰め、剣を振るう。
俺の狙いを悟らせてはいけない。狙うのは、一点のみで良い。
「焦っちゃダメよっ、お兄ちゃんッ!!」
こちらの体勢が崩れた所で、彼女が再び転移する。
エミヤの剣技では勝てない。ならば別のモノを使うしかない。
背後に現れたクロ。剣では間に合わない、絶妙なタイミング。
俺は、干将・莫耶を手放した。
「!?」
クロに背中を見せているこの体勢。それは、八極拳・貼山靠。またの名を、鉄山靠(てつざんこう)にはもってこいの姿勢だった。
これを、狙っていた！
「はぁああ!!」
身体の強化と合わせて放った打撃は、クロを吹き飛ばした。
吹き飛ばされたクロは、やがて立ち上がったがフラフラとしている。
「ゲホッゲホッ、いったぁー…。なんなの?…今のはこの英霊の技じゃないわ」
俺がかつて、言峰との鍛錬の時に幾度となく見た八極拳。
正式に習ったわけではないが、俺は目が良かったから覚えてしまったものだ。
「どうだ?俺の勝ちで、良いか?」
「そうね、…降参よ。これ以上は、ただの殺し合いだし。それはわたしも望んでないわ」
ふぅー、と息を吐きながら安堵する。
謎に満ちた少女との戦闘は、とりあえずは俺の勝ちと相成った。

[第十八話] 少女はクロエに

「さて…それじゃあ尋問を初めましょうか」
「……この扱いはあんまりじゃない？」
「俺もそこまでしなくとも、大丈夫だと思うがな」
降参したクロは、おとなしく連行された。現在、遠坂とルヴィアにより拘束されている。
磔にされ、体には抗魔布の拘束帯を巻かれている。だが、英霊の力を宿している彼女が本気で抗おうと思えば、この程度の拘束で済むはずが無い。つまりは、今の所は本当に争う気はないという事だろう。
「まったく、ここまでしなくても危害を加えたりしないわよ。イリヤ以外には」
「それが問題なんでしょーーーッ!?」
憤慨するイリヤ。命を狙われたのだから当然の反応ではある。
「わからないことだらけなの……全部答えてもらうわよ」
「全部…ねぇ」
遠坂はクロに質問を重ねるが、重要な部分はのらりくらりと躱される。
「もういいわ」
息を吐き、立ち上がる遠坂。
「遠坂、今度は俺がクロと話してもいいか？」
「士郎が？…良いけど、どうするの？」
俺はどうしても、この少女と話したい事があった。それはきっと、この子の根幹に関わる大事な部分だ。
だから、まずは俺とこの少女だけの方が話しやすいだろう。
「みんな、一度部屋を出てくれ。俺とクロの二人だけで話したい」
一同皆、部屋から離れる事を渋ったが何回も説得して、ようやく部屋には二人だけになった。
みんながいなくなると、俺はまずクロの拘束をすべて取り払った。
「逃してくれるの？優しいお兄ちゃん」
「そういうわけでもない。ただ、勝者の特権って奴をまだ俺は使って

ないだろ？」
「大人しくついてきたじゃない、わたし」
「俺は降参するか、聞いただけだ。お願いしたわけじゃない」
「いたいけな少女に、随分と容赦ないのね」
「誰かさんのおかげで、その手の交渉は不得手ってわけでもないんでね」
この場面で一番重要な事。俺の頼みは、そう。
「君の気持ちを素直に聞かせて欲しい。君は本当のイリヤスフィール。…奇跡のような偶然で現界した、聖杯だろう」
彼女の存在の外殻がエミヤなのは、戦ってみて身にしみて分かっている。
ならばその中身は？
本来エミヤが持ち得ない、力（転移）。まるで工程をキャンセルしたかのような投影。
彼女の戦い方は、まるで結果のみを引き寄せているようなものだった。
「そう、そこまで分かっちゃったのね…」
膝を抱えて座り込んだクロは、ぽつぽつと話してくれた。
自分が、この世界の聖杯戦争。その儀式の器（かぎ）となるべく生まれたこと。
その為に生まれたのに、機能を封じられ、知識を封じられ、記憶を封じられたこと。
自分が、なかったことにされたこと。
「わたし、どうしたらいいのかな」
「考える意思があって、動かせる身体がある。だから、この手で自分の日常を取り返したいと思って、イリヤを殺そうとした。でも、本当は分かってる。今更イリヤを殺したって、わたしがイリヤに成り代わるなんて不可能だわ」
「全部奪われた。全部失った。わたしには何も残ってない」
そう肩を震わす少女は、弱りきっていた。
だから俺は、独り言のように呟いた。

「かつて、神稚児として生まれた少女がいた。どんな願いでも叶えてしまうその性質を利用しようと、ある男は孤児となったその子を引き取った。でも男は死んで、その男の息子にその先は委ねられた」
「それって…」
「息子は、悩んだ。自身の正義の味方という願いの為に、その子を犠牲にするか。それとも、人として家族として共に生きていくか」
「選択を後押ししたのは、神稚児自身だった。その少女は、息子と本当の兄妹になりたいと、そう願ったんだ」
「間違いかもしれない。そう思いながらも、兄となった男は妹を守る事を誓った」
「その願いだけは、本当だったから」
　顔を上げ、こちらを見ていたクロの頬をスゥー、と涙が流れる。
「確かに何もかも失ったのかもしれない。だけどまだ、体が残っている。居場所は、これからでも作っていける。もし、本当に君に居場所が無いのなら、俺のもうひとりの妹になったって良い」
「だから、イリヤと話して、美遊と話して、君の家族と話して。君は、君の望みを見つけるんだ」
「どうして…そこまでしてくれるの…？」
　俺は少し照れくさくなり、ポリポリと頭を掻く。
「君はなんというか、その。俺の妹に、美遊に似ていたんだ。だから君だって、必ず生きられる道がある。幸せになれる」
　俺が微笑みかけると、クロも少しだけ笑い返す。
「わたしの望み…は…」
　目をつむり、考え込むクロ。
「家族が欲しい。友達が欲しい。なんの変哲もない普通の暮らしが欲しい。でも、それより。なにより…」
　開かれたその目には、もう涙は無かった。
「このまま消えたくない…！わたしはわたしとしてただ、生きていたい…！」
　一筋の光が少女から立ち昇り、その望みは叶えられた。

後日、狙いすましたかのように帰国した彼女の母親とクロは話し、一応和解したそうだ。
イリヤとも仲直り出来たようだ。本人的にはとても不服らしいが、イリヤの事を姉と認める事でその場は丸く収まったと話していた。
目まぐるしく環境は変わっていったが、かくして。
奇跡の少女はクロエ・フォン・アインツベルンとして、ここに生きている。
それに関しては大変良い事なのだが……。
「お兄～～ちゃ～～ん!!魔力供給のキス～～!!」
「だから、それはダメだって言ってるだろ…クロ」
「クロッ!士郎さんはクロのお兄ちゃんじゃないでしょ!?」
「えー、でもそのお兄ちゃんが妹になってもいいって言ったのよ」
!?、それは聞き捨てならない。本当?お兄ちゃん」
「はぁーー、…なんでさ」
俺達の日常は、更に騒がしいものになっていくようだ。

[第十九話] 前任者

あれから、時はさらに流れる。
イリヤとクロがちょっと本気のドッジボールをして怪我をしたり。
家の裏で新技の開発をしていたイリヤが誤って給湯器を壊してしまい、イリヤ一家がルヴィアの屋敷にお風呂を借りに来たり（こちらの世界の衛宮士郎も来ていた為、俺はずっと隠れていたが）。
学校でパウンドケーキを作って料理勝負をしたらしく、美遊とクロからケーキを貰ったり。
賑やかで、少しぎこちないけれど、クロとの新しい生活はちゃんと廻り初めた。
彼女が居場所に悩む事は、もうないだろう。
だが、平穏というのは脆く崩れ去る。
カードにまつわる出来事はこれで終わりでは無かった。

「コンビニの水羊羹が食べたいなんて、ルヴィアも意外と庶民派な所があるんだな」
「うん。ルヴィアさんはちょっと変わってる」
その日、ルヴィアに買い物を頼まれた俺と美遊は、外に出ていた。
認識阻害の外套を貰ってから、こうして美遊ともちょこちょこ出かける事が出来ている。
その時、不意にズゥンと音が鳴った気がした。
「今、変な音しなかったか…？」
「そう、かな？」
音の方向は、ルヴィアの屋敷の方だった。
胸騒ぎを感じ、急いで屋敷へと戻った俺達は、愕然とする。
目に入ったのは、ほぼ全壊した屋敷。
そして、ボロボロのイリヤとクロ。
「し…ろう、さん」
「はあ、はあ…遅いわよ、お兄ちゃん」

「屋敷の警告音がならない。貴方たちも関係者ですか…次から次へと…」
どうゆうことなのか、この襲撃者は何者なのか。
そう視線でクロに訴えかける。
「バゼット・フラガ・マクレミッツ。協会一線級の封印指定執行者。カード回収の、前任者ですって」
なぜ、今更になって協会が…。疑問はあるが、とりあえずイリヤとクロを庇うように、俺と美遊は前に出た。
「クロ…少し休んだ方が良い。魔力もキツイだろ」
「そうさせてもらうわ…。でも気をつけて。カードの最初の二枚、黒化英霊のアーチャーとランサーを仕留めたのは彼女よ。わたしやお兄ちゃんの手の内は、もう知られているわ」
それでも、黙ってこの状況を見過ごすわけにもいかない。
「投影開始(トレース・オン)」
相手は素手だ。それにもかかわらず、攻防はこちらの不利。
斬撃は弾かれ、美遊の魔力弾は叩き潰される。
「確かに、貴方は手強いようだ。ですがその戦い方はもう、見飽きました」
ギアをひとつ上げたように、バゼットの動きが加速する。
「硬化、強化、加速、相乗…!!」
バゼットのグローブに刻まれたルーンらしきものが起動する。
先程までの攻撃でもこちらを上回っているのだ。
このままでは防げない。
そう判断した俺は干将を防御に、莫耶に壊れた幻想(ブロークン・ファンタズム)を発動し、爆発により少しでも攻撃を逸らす。
それでも心臓を抉るような勢いの貫き手は干将を砕き、英霊化した俺の肋骨にヒビを入れた。
「グッ…ハッ…!!」
「「お兄ちゃんっ!!」」
吹き飛ばされた俺を見て、三人が駆け寄ってくる。
「防ぎましたか。ですが、貴方にもう次の手は無い」

そう冷酷に告げるバゼット。多少スーツは焦げているが、それでも彼女は健在だ。
立ち塞がるように美遊が俺の前に立つ。
その肩は、怒りで震えていた。
「…ゆる、さない。お兄ちゃんをこれ以上傷つけるのは、許さないッ!!」
それは初めて見た、美遊の激昂であった。
「ライダー!夢幻召喚(インストール)!!」
夢幻召喚(インストール)と同時に天馬が現れ、そして魔力が高まっていく。
「美遊様…!いけません美遊様!!彼女相手に宝具は…」
「この瞬間を…待っていた…」
そう呟いたバゼットの手に呼び寄せられたそれは、剣だった。
無意識の内に解析し、その力に体がぶるりと震える。
あれを使われれば、美遊が死ぬ。
思考する暇なく、俺は投影を開始した。
ハリボテでは駄目だ。あの剣の因果に割り込む必要がある。
剣の正体は、逆行剣フラガラック。敵の切り札より後に発動しながら、時間をさかのぼり切り札発動前の敵の心臓を貫く魔剣。
限りなくその魔剣の真に迫った投影が必要だ。
基本骨子、解明。
構成材質、解明。
基本骨子、変更。
対象補足、変更。
「後(ア)より出(ン)でて先(サ)に断つもの(ラー)――――」
「斬り抉る戦神の剣(フラガラック)!!!」
「偽(フ)・斬り抉る戦神の剣(ラガラック)!!!」
バゼットが放ったフラガめがけ、投影した俺のフラガが走る。そして、フラガが放たれたという事実がまるで無かったかのように、二本の剣は地面に転がり、ベキンと折れた。
「!?、フラガを、相殺したッ!?」
驚いているバゼットを尻目に、美遊の方へ向き直る。完全に頭に血

が昇ってるようだ。天馬の突進は止まっていない。
「熾天覆(ローアイアス)う七つの円環――!!」
「騎英(ベルレフォーン)の手綱――!!」
花弁の盾と、天馬が激しくぶつかり眩しく光る。
光が晴れた頃には、天馬はもうそこにはいなかった。
「お、お兄ちゃん…、どうして…」
美遊の言葉を引き継ぐように、バゼットが口を開く。
「…どうして私を助けたのです。聞く限り、貴方はその少女の兄なのでしょう?それを殺そうとした相手を助ける必要など無い。貴方は先の天馬の一撃を回避すれば、それで良かったはずだ」
「あんたの為じゃない。兄が妹を、美遊を人殺しになんて、させるわけないだろう」
予想外の答えだったのか、バゼット少し目を見開いた。そして、構えを解き腕を下ろした。
「それで、どうするのです。どうやったのかは知りませんが、貴方はフラガラックを無効化できる。しかし、より消耗しているのはそちらの方でしょう。このまま戦闘を続行すれば、私が勝つ」
「待ちなさい、バゼット」
そこに颯爽と現れたのは、遠坂だった。
「遠坂…無事だったのか」
なんとかね、そう言った彼女はバゼットと交渉に入る。
遠坂は、バゼットのカードを全て回収するという任務を逆手に取った。
地脈を探ることができるのは冬木の管理者たる遠坂の者だけ。
そしてその地脈図に写り込んだ、八枚目のカードの存在。
「八枚目――」
それが決定打となり、バゼットは協会に指示を仰ぐために一時休戦の必要ありと判断。この場を立ち去った。
交渉により、奪われた六枚のカードのうち三枚は返してもらえた。
しかし、俺と美遊の表情は明るくない。
「八枚目のカード…それって、お兄ちゃん」

「ああ。聖杯起動時に用いたクラスカードは七枚だけ。八枚目なんて……ない」
あるとするならば。
あの聖杯戦争で使われるはずだった、本来のクラスカード・アーチャー。
英雄王ギルガメッシュのカードしかない。
「……」
底知れぬ不安感は、増していくばかりだった。

［第二十話］変わりゆく体

地獄を見た。
終わりゆく人類を救う為に、多くの者を殺した。
地獄を見た。
人々を救いたかったはずなのに、守るべき人々に裏切られ続けた。
地獄を見た。
全ての人を救うなんて、そんな事が不可能なのは分かっていたはずなのに。
――ああ、またこの夢か。
俺はただ、その地獄の光景を見ていた。
そして最後には、いつも同じ場所にたどり着く。
無数の剣が突き立てられた、一面の荒野。
そしてその、剣の丘にたったひとり立つ男。
赤い外套を纏う、白髪の男。肌は浅黒い。
俺は一歩、また一歩と剣の丘を登り、外套の男に近づく。
砂嵐が舞い、目を閉じる。
目を開いた時、剣の丘に立っているのは、俺自身だった。

「……はぁ…」
目覚めた俺は、思わずため息をついた。
最近、同じ夢ばかりを見る。原因はなんとなく分かっている。
体を起こし、視線を下へ降ろす。
そこには、まだらに浅黒い色へと染まりつつある俺の腕があった。
自分が至るかもしれなかった未来。彼（エミヤ）の技能と魔術回路を先取りし、その起源すらも譲り受けた。
この身は戦うごとに、英霊エミヤに置換（侵食）されていってるのだ。
「それで、私達に相談に来たってわけね」
「賢明な判断ですわね。こんな現象、秘密にされていてはたまったものではないですわ」

俺はこの現象に関して、遠坂とルヴィアに打ち明けることにした。
黙っていたところで、自身で解決できるものでも無いと思ったからだ。
「人間の英霊化…。英霊の力を人の身で行使するなんて元来無茶があるわ。そんなことをすれば、体が耐えられず内側から崩壊しかねない」
「ええ…。好意的に考えれば、シェロの侵食現象は一種の防衛機能とも言えますわね」
「けど、侵食されきってしまえばそれは士郎では無くなってしまう…」
「本来は、クラスカードがその侵食を防ぐ役割も担っているのでしょうね」
凄い。二人は次々と推論を重ねていく。
だが、一番重要な本題。この侵食を防ぐ為にはどうしたら良いのかと話を振ると、二人共苦い顔をする。
「一番簡単な方法は、もう力を使わないことですわね」
ルヴィアがそう言う。だが、その選択肢はまだ受け入れられない。俺はまだ戦えるし、戦いはおそらくまだ終わらないからだ。
首を振る俺を見て、遠坂はため息をついた。
「はぁ…そうね。士郎がそう簡単に諦めるような人間じゃないのは分かってたわよ」
遠坂が椅子から勢いよく立ち上がる。
「だから、出来ることをしましょう。手をこまねいて待ってるだけなんて、性に合わないわ」
侵食を防ぐ有効な手立ては分からない。だから、遠坂が言うにはまず、自己の意識をエミヤとの接続から保護するらしい。
「洗脳や催眠の一種に近いかしらね。士郎が繋がっているエミヤと、一時的に意識のコンタクトを図る。相手が乗ってくれれば、会話でもなんでも良いわ、彼と自分は違う自我だと士郎が強く意識できれば取り敢えず成功ね。ようは、上塗りされないように境界線を作れれば良いのよ」
成功するかも分からないし、どれくらい効果があるかも分からない

がやってみる価値は充分あるだろう。
俺の額に、遠坂が手を当てた。
「いくわ…抵抗しないでよ？」
俺の意識はやがて、遠のいていった。

「なんの用かね…わざわざ私と繋がりに来るとは」
気が付くと、あの剣の丘にまた俺は来ていた。そして、目の前には夢で出てきた男。
英霊エミヤがいる。
「なんの用っていうか、なんだろうな…俺はあんたに会うことが出来たら、ありがとうって、礼を言いたかったんだと思う。あの時、俺に力を貸してくれてありがとうって…本当に」
その言葉を聞いた彼は、心底嫌そうな顔をした。
「その顔で真面目に礼を言われると、気味が悪いな」
「なっ!?こっちは、本気でそう思って…」
クククッと彼は笑った。本当にこんな奴が俺の可能性のひとつなのか、疑いたくなるところだ。
「いや、済まない。今の言葉は撤回しよう。そうだな、礼は素直に受け取ろう」
「…ったく」
そのあと俺達は、ポツポツと何点かだけ会話を交わした。
彼の質問はシンプルなものだけだった。
家族は？
兄妹は？
親友は？
俺がそれらを話すと、彼はそろそろ時間だな、と背中を見せる。
「ひとつ、助言してやろう。致命的な侵食を防ぎたいのなら、固有結界だけは使うな。小手先を弄しても、それだけは誤魔化しが効かない。英霊エミヤの最たるものだからな」
そして彼は背を向けたまま、最後にこう言い残した。

「衛宮士郎、妹の手を取ったのならば、離すなよ。…守り通してみせろ」
「言われるまでもない」
「ハッ…そうか。ではな、衛宮士郎」

「気が付いた？士郎。調子は…どう？」
意識が戻ると、不安そうにソワソワとしている遠坂とルヴィアが目の前にいた。
「なんとなくだけど、前より調子は良い気がする。ありがとう、遠坂、ルヴィア」
既存の魔術回路と、置き換えられたエミヤの魔術回路の境目の淀みのようなものが少なくなった気がする。さらに、体に感じる負担も前より軽くなっている。
一応、様子見で休んだ方がいいと言われた為、俺は自室に戻ることにした。
部屋を出る直前、遠坂がぼそりと言う。
「いつまでも、イリヤ達に隠し続けることは出来ないわよ」
「ああ、分かってるさ」
力を使う限り、侵食は止まらない。いずれはこの肌の色も隠しきれないほどに広がるだろう。
それでもまだ、俺は立ち止まれない。
自身が掴んだ、大切なものを守るために。

［第二十一話］イリヤと過ごした一日

～イリヤｓｉｄｅ～

「ねぇ、ルビー」

「どうしたんです？イリヤさん」

わたしは、ルヴィアさん達がバゼットという人に襲われた時の事を思い出していた。

カード回収の前任者だったというあの人は、本当に人間なのかと疑うほどに強かった。

あの時クロがいなかったら、わたしはもっとあっさり負けていたと思う。

「わたしって、あんまり強くないよね…」

それがわたしの素直な感想だった。

ふよふよと浮かびながら話を聞いていたルビーは、何を強さと定義するかにもよると思いますがねー、と言う。

「確かに美遊さんの冷静かつ大胆な判断力は見事ですし、クロさんと士郎さんは英霊そのものと言ってもいい戦闘力ですし。凛さんとルヴィアさんも、あんなでも一流の魔術師ですからねー」

うん、そう考えるとみんな人間離れしてるかも。

「それに加えて、イリヤさんはクロさんが分離した影響で出力が大幅に下がってますからね」

「ズバズバと言うね、ルビー」

「まぁ事実ですしー」

軽く精神的ダメージを受けたが、確かにそれが事実なので特に反論はしなかった。

八枚目のカード回収は、カードが地中深くにあるため準備に時間がかかるらしい。

その間は、好きに過ごして構わないと凛さんは言っていた。

「子供が子供らしく生活するのをやめさせる程、腐ってないわよ。魔術師って言ってもね」と語る凛さんは、とても大人っぽく見えた。

「うん、特訓しよう」

でも何もしないのも不安なので、わたしは士郎さんに特訓をつけてもらおうと思いたった。

「実戦形式で良いんだな？イリヤ」
「うん、お願いします。士郎さん」
休日、人のいない郊外までやってきたわたしと士郎さん。
特訓をしたいと相談した時は、士郎さんは意外そうな反応をしていたけど、その話を又聞きしていた凛さんとルヴィアさんも訓練する事に賛成してくれた。
「これくらいが手頃かな。転身するなら、間違っても怪我はしないだろう」
士郎さんが投影魔術で作ったのは、いつもの双剣とは違った物だった。
「あれって…」
「黒鍵ですね。聖堂教会の代行者の正式武装、ですが本来は投擲して使う物ですからね。ルビーちゃんの物理保護で完璧に防げますので、安心してください」
補足して説明してくれるルビー。よく分からないけど、一応怪我はしないように配慮してくれてるらしい。
「じゃあ、始めようか」
そう言って、黒鍵を二本構えた士郎さんがこちらを見据える。
あの時のバゼットさんを前にしたような、士郎さんの威圧感に思わず半歩下がってしまう。
その隙を見逃さずに、士郎さんは一気に間合いを詰めてくる。このまま接近戦になってしまえば、こちらが不利だ。
「…ッ！、斬撃（シュナイデン）!!」
近づかれないように、広範囲を横一文字になぎ払う。
けれど、効果はあまり無かった。
「防がれてるっ！」
「攻撃を弾く瞬間に、強化魔術を施してるみたいですね」

それに、さっきのは広範囲に広げすぎて威力が落ちてたんだ。
結果、士郎さんは間合いを詰めきり、わたしは躱せずに一太刀もらってしまった（もちろん、怪我はしていないけど）。
「イリヤ。怪我しないからって、油断はするなよ。アサシンの時みたいに、かすり傷が致命傷に繋がる事だってあるんだ」
「うん…、もう一回お願いします！」
それから時間を忘れるようにわたし達は訓練を続けた。
そして、そろそろわたしの体力が限界だと判断した士郎さんは、仕上げにと黒鍵を幾本も投影しこちらに投擲した。
「!?、これって…」
一度、クロが使ってるのを見た事がある攻撃。
鶴翼三連と呼ばれる、投擲と斬撃を合わせた必中不可避の絶技。
それを黒鍵で模倣しているのだ。
どうする？
全方位防御？それじゃダメだ、反撃に回せる魔力が無い。
もっと的確に、正確に…。
「ここだっ…！」
星形の物理保護壁が、投擲された黒鍵の全てを空中で固定する。
「収束砲射（フォイア）!!」
そして、残った魔力を前方へと吐き出した。
「驚いた…模倣とはいえ、土壇場で鶴翼三連を破るなんて」
魔力砲は士郎さんに当たったかに見えたが、士郎さんは投影した干将・莫耶でちゃんと防いでいた。
「はぁ…はぁ…」
「お見事でしたよ！イリヤさん！物理保護壁による拘束…任意座標への展開をあそこまで精密に、しかも複数同時に行うなんて」
ルビーは興奮気味に、称賛してくれた。
「機転は利く。身のこなしや判断力も上々。欠点と言えば、どの攻撃も無意識に手加減していた事だな」
訓練が終ったあと、士郎さんは今日の総評を話してくれた。
「君の優しさは美徳でもあるけど、戦いにおいては弱点にもなり得る

事だけは覚えておいた方が良い。実際、さっきの攻撃なら俺は喰らいながらでも反撃できるくらいのものだった」
戦いにおいては、非情に振る舞う必要がある。
家族を奪われそうになった士郎さんだからこそ、その言葉には重みがあった。
「それでも…わたしは話し合いの余地があるなら、そうしたい。だって、わたしに大切なものがあるように、相手にだって大切なものがあるはずだから」
「そうだな…君は、それで良いのかもな」
優しく微笑んだ士郎さんは、わたしの頭をポンポンと撫でてくれた。
…美遊には悪いけど、ちょっと得したかも。
「今日はありがとうございました、士郎さん。わたし、なにか掴めた気がします」
「いや、俺も今日は良い一日になった。これからも美遊をよろしく頼むよ、イリヤ」
「はい！士郎さん！」
そんなこんなで、少し自分に自信がついた一日だった。
～イリヤｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

［第二十二話］クロエと過ごした一日

～クロエｓｉｄｅ～

「ちょっとイリヤ…昨日、お兄ちゃんと一日中一緒にいたってホント？」

そうイリヤにわたしは問いただした。

「士郎さんと？うん…そうだけど」

「なんで言わないのよ～抜け駆けするつもり？」

「抜け駆けって…なによ。わたしはただ特訓してただけだよ！」

その時は知らなかったけど、イリヤは自分の弱さを気にして特訓してたそうだ。今にして思えば、ちょっと悪いこと言ったわね。

「それでも、黙っちゃいられないわよ」

「もう…人の気も知らないで。そんなに言うなら、クロも士郎さんと出かければ良いじゃない」

「……、それもそうね」

思い立ったが吉日、わたしは早速お兄ちゃんをデートに誘うことにした。イリヤは余計なことを言っちゃったなーみたいな顔をしていたが、時既に遅し。

二日連続でお仕事を休ませるのも不味いかと思って、一応ルヴィアにはちゃんと聞いた。

「むしろ、シェロは少し働き過ぎですわ。無理矢理にでも、連れ出してやりなさい」

返ってきたのは、肯定だった。ルヴィアは止めるかと思ったんだけどね。

そんなこんなで、わたしとお兄ちゃんは新都へ出かけることになった。

「お兄ちゃん、次はあっちに行こっ！」

「はしゃぎすぎて転ぶなよ、クロ」

「そんなヘマはしないわよ、わたしはね」

新都にやってきたわたしたちは、色んなお店をまわって歩いた。
しばらく経って、だいぶ歩いたのでちょっと休憩することにした。
ベンチで座って待っていると、お兄ちゃんも隣に座る。
「ほら、アイスクリーム」
お兄ちゃんが露店で買ってきたアイスクリームを受けとる。
「ありがとっ。うーん、美味しい！」
…なんだかこういうのって、嬉しいなぁ。
「ねぇ、お兄ちゃん…」
「ん？どうした、クロ」
「わたし、こんな風に過ごせる日が来るなんて思わなかった。美味しいもの食べたり、オシャレしたり。ホントに生きてるみたいに」
イリヤの奥底に封印されていたわたしは、わたしが掴むはずだった生活をただずっと眺めていた。
人並みな生活。家族がいて、日常があって、目的がある。
そんな、普通の人間にとっては当たり前のもの。わたしにはそれが途方もなく遠く、羨ましかった。
わたしはここにいるよと、叫んでみてもその声は誰にも届かない。
ママにも、パパにも、セラにもリズにもお兄ちゃんにも。そこにいるのはわたしだったはずなのに。
誰かにわたしを見つけて欲しかった。
だから本当に、あなたに出会えてよかった。
居場所をもらった。家族として、受け入れてもらえた。
イリヤじゃなくて、わたし（クロエ）として生きていける道をもらった。
「だから、お兄ちゃんには感謝してる。それに、イリヤにもね。本人には言えないけど、存在してるのが奇跡みたいな、しょせん影法師に過ぎないわたしを受け入れてくれたの」
わたしが何者なのかを知ったイリヤは、泣きながらこう言ったんだ。
「わたしが負うはずだった苦しみを背負わせて、ごめんなさい。そして、ありがとう」って。
イリヤの事も憎かったけど、あの子はわたしなのだ。最初から、拒

絶なんてできるわけなかったのだ。
「でも…、わたしはいつか消える存在よ。存在しているだけで魔力を消費する。魔力供給を受けなければ、この世に存在すらできない」
「クロ…」
手に入れた日常は、暖かくて、幸せで。
だからそれがこぼれ落ちるのが、たまらなく嫌なんだ。
「元々、わたしは無かったものにされたイリヤそのものだったから、…死んでも構わないって思ってたわ。でも、こんなに幸せだとわたし、消えるその時を想像するのがコワイわ…」
こんな毎日がずっと続くなんて、楽観的に考えることはわたしにはどうしても出来なかった。
こうやって生きていられることを喜ぶ反面、心の隅には常に消失する恐怖を抱えている。
ダメだな…楽しい一日にしようと思ってたのに、お兄ちゃんにはつい弱音を吐いちゃう。
「自分が消えるかもしれない、その不安は確かに怖いよな…」
「え…？」
そう言い、お兄ちゃんはわたしの手をギュッと握る。
握られた手を離さないように、わたしは無意識のうちにその手を握りかえしていた。
あったかい、なぁ…。
「でも、俺がいる。イリヤがいる、みんながいる。その不安を、君がひとりで抱え込まなくてもいいんだよ、クロ」
お兄ちゃんの言葉は、わたしの不安を軽くしてくれた。
本当に、こういう所がお兄ちゃんなんだよなぁ…。
「うん、そうね。なんだか、わたしらしくなかったわね。次のお店に行きましょ！お兄ちゃん！」
「まだ見てまわるのか…」
呆れているお兄ちゃんの手を引いて歩き出す。
「当たり前でしょ、女の子の買い物は長いのよ」
「はいはい。わかりましたよ、お嬢様」

二人で笑い合いながら、わたしは幸せを噛み締めた。

この時のわたしは、だから見落としていた。
どうしてお兄ちゃんが、自分が消える感覚は怖いということに同意したのかと…。
それをわたしが知るのは、もっと後のことになる。
～クロエｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

［第二十三話］後悔の形

〜美遊ｓｉｄｅ〜

７月２０日。今日はわたしの誕生日。

イリヤとクロも同じ誕生日であった為、今日は学校の同級生たちと一緒に海に行く事になった。

誕生日。知識にはあるけれど、誕生日って祝うようなものなのだろうか？少なくともわたしは一度も祝ってもらった覚えは無い。

全てを知った今となっては、お兄ちゃんを非難しようなんて気は無い。ただ、お兄ちゃんも悩んでたんだって知ってるから。

歳を重ねるごとに、神稚児はただの人間へと近づいて、堕ちていく。わたしがひとつ歳を重ねるごとに自身の理想と、家族の情に挟まれていた彼の苦悩は、わたしなんかには推し量れない。

だから、家族として生きていけるようになった今だからこそ、わたしはお兄ちゃんと一緒に時間を過ごしたかった。わたしがあの日、行きたがった海という場所で。

イリヤたちとの誕生日会が終わったあと、わたしはお兄ちゃんを海に誘った。

もう時間は夜になるけれど、星が映る海はなんだか、心揺さぶるものがあった。

「それでね、こっちの世界の士郎さんが言ってたの。誕生日って、生まれてきたことを祝福し、生んでくれたことに感謝し、今日まで生きてこられたことを確認する、そんな日じゃないかって。……お兄ちゃん？」

返答がなかったため、視線を星空からお兄ちゃんに移す。

遠くを見つめるその瞳は、何を映しているんだろう。

思えば、今日わたしが誕生会から帰ってきた時からお兄ちゃんの様子は変だった。わたしがいなかった日中に、なにかあったのかもしれない。でも、それをお兄ちゃんはわたしには教えてくれないで、ひとりで胸の内に抱えてしまう。

わたしじゃ頼りないのかな…、お兄ちゃんの力になれないのかな

…。
　無力感、自己嫌悪。そんな感情にわたしの心が埋め尽くされそうになった時、ふわりとお兄ちゃんに抱きしめられた。
「…お兄ちゃん？」
「ごめんな、美遊。心配かけて。それと、今までまともに誕生日を祝ってやれなくて本当にすまなかった」
「ううん。…しょうがないことだと、わたしは思う」
　改めて見た、お兄ちゃんの目はまっすぐだった。
「俺は…諦めない。それが運命だとしても、抗ってみせる」
　お兄ちゃんがなにを思っているのか、細かい事は分からない。けど、わたしは今まで貰ってばかりだったから。
　今度はわたしが彼の思いを守りたい。そう思ったんだ。
～美遊ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

　今日は美遊の誕生日だ。今まで、ろくに誕生日も祝ってやれていなかったが、今は美遊が歳を重ねる事に悩む必要もないのだ。
　日中は学校の人たちと誕生日会をするらしい。こちらの世界の衛宮士郎がいるので、俺は参加できない。認識阻害の礼装を着ていても、こちらの世界の衛宮士郎と並んで立てば、違和感に気がつく者がいてもおかしくない。
　そこで、夜に美遊とふたりで海に行くことになった。プレゼントでも買おうかと、俺は出かける事にした。
「うーん、といってもどうするかな。プレゼント選びなんて分からないしな…うわっ！」
「きゃっ！…す、すいません」
　考えながら歩いていると、人とぶつかってしまった。
　女性が抱えていた荷物を拾おうとしゃがみ込むと、視線がぶつかる。
「せん…ぱい…？」
「さ…くら…」

そこには、いるはずのない彼女がいた。

「世の中には同じ顔の人が三人はいるって言いますけど…、本当にそっくりな人っているんですね。しかも、名前も士郎さんだなんて」
「ああ、俺も驚いたよ。君が知り合いにそっくりで…」
冷静に考えれば、俺が知っている桜がこの世界にいるわけがないのだ。
目の前にいるのは、この世界の間桐桜だ。
今まで無意識に俺は考えないようにしていた。あの世界に置き去りにした彼女の事を。
切嗣の言葉を思い出す。誰かを助けるという事は、誰かを助けないという事。
俺は選択したのだ。妹を、美遊を助けると。
「あの…言峰さん？なにか、悩み事ですか？」
桜は不思議そうにこちらの顔を覗き込んでいる。
彼女にとって、俺は先輩では無い。少し、チクリと胸が痛む。
「悩み事、聞きましょうか？さっき出会ったばかりの私が言うのも変かもしれないですが…」
どうしてそこまで？そう聞くと、彼女は照れながら言う。
「なんだか、放っておけなくて…ですかね？」
そんな彼女を見た俺は、つい聞いてしまった。
「もしも…君の好きな人が、目の前からいなくなってしまったら、君ならどうする？例えば、妹を助けるために…とか」
うーんと、首をひねりながら桜は悩み、そして答えた。
「きっと、待ち続けますかね…私にはそれしか出来ないから。それに、私の大好きな人だったら必ず戻ってきてくれるって、信じてますから」
そう笑った彼女は、…綺麗だった。
俺に残された後悔。
だけど、いつかそれを乗り越えようと俺は改めて思った。

彼女が、待ち続けているのなら。

［第二十四話］二枚目のアーチャー

「八枚目のカード回収の作戦会議、始めるわよ」
地中深くにあるカードに接触するための、ボーリング工事は完了。
あとはこれまで通り、鏡面界にジャンプしてカードを回収するだけ…なのだが。
「簡単にはいかないでしょうね。八枚目のカードはこれまでの比じゃないほど魔力を吸ってる。地脈が収縮するほどにね。そして、そのカードはおそらく…」
こちらに視線を向けた遠坂の言葉を、俺が引き継ぐ。
「英雄王ギルガメッシュ…、数多の宝具の原典を有しそれを矢のように無造作に無尽蔵に放つ。俺が参加した聖杯戦争の本来のアーチャー」
「まさか、そんなカードまであるとはね…本当にインチキじみてるわ」
英霊を象徴する宝具は原則ひとりにひとつ。だが、この英霊の所有している宝具の数は規格外だ。
頭を抱える遠坂。魔術師ではないイリヤは、いまいち深刻さが分かっていないようだが、それでも場の空気に呑まれ表情は暗い。
「あのカードは間違いなく…最強だ。俺達だけで仕留めきれるとは限らない」
「バゼットさんはどうなったんですか？」
手をあげて発言する美遊。
それも問題のひとつね。と言う遠坂。
「彼女も同行することになったわ…といっても勿論仲間ではないわ。バゼットの使命はカードの回収、どちらが先にカードを手にするかの競争になる」
「協力を求めるのはムリってわけね…」
なら、とにかく速攻で決着をつけるべきじゃない？とクロは提案する。
その意見は、確かに一理ある。
放っておけば、地脈より魔力を吸い続けているカードはより強くな

る。
「そのとおりね。予想通りなら、おそらく過去最強の敵…そんな相手にとれる作戦はひとつだけよ。最大火力をもって、初撃で終わらせる!!」
カード回収、最後の戦い。
それはもう、今夜に迫っていた。

「――いきます!」
鏡面界への接界(ジャンプ)が終わった時、そこには悪意が満ちていた。
可視化するほどの黒い魔力の霧。空間にはそれが溢れていた。
それでも、ルヴィアは怯まずに飛び出す。
「Ｚｅｉｃｈｅｎ(サイン)――!」
世界蛇(ヨルムンガンド)の口。吸引圧縮型の捕縛陣は敵を一箇所に留める。
「まずは捕縛成功!!イリヤ!!美遊!!チャージ開始!!２０秒よ!!」
すかさず、カレイドの少女達が魔力砲のチャージを始める。
俺達が持っているクラスカードはキャスター、アサシン、バーサーカーの三枚。
アサシンでは火力不足。キャスターでは時間がかかりすぎる。
バーサーカーは味方が近くにいる時は危険と判断され、カードの使用はせずに戦う事に決めていた。
「Ｖｏｍ(１) Ｅｒｓｔｅｎ(番) ｚｕｍ(ら) ａｃｈｔｅｎ(８番)、Ｅｉｎｅ(直) Ｆｏｌｇｅｓｃｈａｌｔｕｎｇ(列起動)――」
そして、遠坂の砲台と評しても過言ではない、魔力の高速回転増幅路・打ち砕く(トールハンマー)雷神の指。
放たれた魔力砲は、敵をもろともに飲み込む。だが、まだ決着はつかない。気配が消えていない。
「――Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ」
クロと俺は同時に投影を始める。
俺は螺旋剣を、クロは聖剣を矢として番える。
「壊れた幻想(ブロークン・ファンタズム)……!!」

それは剣の持つ概念そのものを使い捨ての爆弾とする絶技。
俺達はみな、今振るえる最大の一手を打った。
だが、アレは俺達のすべてを超えていた。
「やはり…駄目かッ！」
いつの間にか現れた盾に、攻撃は防がれていた。
「退却ですわ!!作戦は失敗!!戻って立て直しを……」
「では、次は私の番ですね」
そう言ったバゼットが、単身で突っ込む。
「クロッ!!合わせるぞ！」
「うんッ！お兄ちゃん!!」
これは俺がクロと打ち合わせていた事だ。
俺達の作戦が失敗した時、バゼットは自分ひとりでも戦おうとするだろう。
バゼットの突破力は、英霊にも比類するものだ。俺達と合わせて、英霊三人分の力。
仮に協力は出来なくても、俺達が勝手に彼女のフォローをする分には関係無い事だ。
バゼットに飛来する宝具の数々を、俺とクロが迎撃する。
一振りを弾く事に干将・莫耶は砕けるが、その度に投影する。
「貴方たち…礼は言いませんよ」
そして標的にたどり着いたバゼットは、数え切れないほどの殴打を浴びせる。
だが、いくら損傷を与えても莫大な黒い魔力がその身体を修復していく。
そしてお返しと言わんばかりに、数多の宝具が降り注ごうとしていた。
「マズイッ……！クロ!!頼む！」
俺達はまだ良い。だが、後ろにいる者たちにはこの宝具の雨を防ぐ手段が無い。イリヤの物理保護壁だけでは、防ぎきれない。
「まかせてっ！」
先程まで隣にいたクロが、瞬時にイリヤ達の元へと戻る。

俺には出来ない彼女自身の技、転移。これが出来るからこそ、俺はイリヤ達の元から距離をとっても大丈夫だと判断した。
「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）――!!」
そして、英霊エミヤの絶対の守りが花開く。
開いた六枚の花弁は、一枚、また一枚と壊されるがそれでも充分に時間を稼いでくれている。
「さぁ――詰めだ」
前へ。前へ。
逸らし、躱し、俺とバゼットはとにかく前方へ進む。
俺はバゼットが近づく為の、隙を生み出す。
「投影開始（トレース・オン）、全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）…!!」
彼女に迫りくる剣を、投影した剣を射出し撃ち落とす。
「…!!、まさか二度も助けられるとは」
そう言い、ゴキリと指を鳴らした彼女のグローブが光る。
「硬化、強化、加速、相乗…!!」
いつか見た、ルーン魔術による必殺の一撃。
その一撃は確かに奴のカードを獲った。
だが次の瞬間バゼットの手は弾かれ、奴はまた動き初めた。
「バカな…!!カードを抉り出されてなお…!動けるのか!!」
「セイ…ハ…イ…」
その時、俺達はその声を聞いた。
だがその言葉の意味を理解する間もなく。
奴が取り出した剣は――根源的な恐怖をもたらした。
解析、不能。
複製、不能。
あの剣は、俺達の手に負えない…!。
俺達は必死の思いで、鏡面界から脱出した。
「だ…脱出…できた？」
全員があの、神話のごとき光景を見た。その光景は、思い出すだけで心胆を寒からしめる。
「我々だけではどうあっても勝ち目がない。もはやカードを回収する

のではなく、別の解決案を模索すべきだ」
立ち上がったバゼットは、そう言う。
「そうね。出来る限りの事はしたし、あんな奴を相手にして誰も犠牲にならなかっただけ僥倖ね」
遠坂もそう同意した。その時。
ビシッ。
音が聞こえた。
空間に亀裂が入り、広がって割れていく。
「こんなことが…あり得るとは…」
敵は、鏡面界を破って現れた。
まだ戦いは、終わっていない。

［第二十五話］運命

鏡面界を割って現れた敵は、市街地へと出てしまった。
ルヴィアがとった次善の策、爆破により１６０万トンのコンクリートと７２０万トンの地層で押しつぶすというのも、飛行する宝具により突破された。
そして聖堂教会のカレンと名乗る人物の情報により、奴の目的地は円蔵山のはらわた、地下大空洞であると推察された。
飛べるイリヤと美遊は先行。残った俺達は車とバイクで移動する。

「アインツベルンが１０年前に起こした願望器降臨儀式。今回の事件は…その残骸が招いたと見られているようね」
だが、実のところそれは違う。
「聖杯戦争は不完全な形で集結。聖杯は成ることなく、術式は半壊したまま今も大空洞に眠っているはずよ」
その聖杯になるはずだったはずのクロがそう言う。
「そして、私達にとって既知のことですが…アインツベルンのものとは別に存在する、もうひとつの聖杯戦争。シェロが勝ち残った、カードを用いた別物が混ざり込んだ」
俺がもといた世界の降臨の儀と、同じ場所。
「儀式を、大魔術陣を乗っ取るつもりだっての…？」

山のふもとにたどり着き、駆け上がっていると突然カレンが血を吐き出した。
「かッ…!!」
「ど、どうした!?」
「これは魔術の反動、気にしないでいいわ。私はただのカナリヤだから。それより…貴方達の予想通り、この術式はアインツベルンのものではないわ」
カレンは置いていくことにして、移動を再開する。

「…速度を合わせる必要もないでしょう、先に行きます」
先行するバゼットに、俺とクロが追随する。
たどり着いた先には、肥大した黒いなにかがそこにいた。
「なんなんだ…こいつ!!」
「攻撃方法から見て…八枚目のカードでしょう。しかし、どうしてこんな異形に…!」
合流したイリヤに状況を尋ねる。
「あの中に、美遊が…!?」
悔しそうに顔を歪めるイリヤ。
「美遊は嫌だって、言ってた。こんなところで、終わりたくない。運命に、抗うって!!」
「だから、わたしも逃げない。美遊を…絶対、絶ッッ対助け出す!!!」
「サファイア!力を貸して!」
迫りくる神造剣を、イリヤは真っ二つに切り裂いた。
「…君は、なにものだ?」
それは誰が呟いた声だったか。いや、この場にいる者ならば皆思ったことだろう。
イリヤの出力が桁違いに増大している。
「力の規模が大きすぎる…!個人であんな魔力の行使が可能なのか…!?」
あれほどの大出力は、イリヤには原理的には不可能なはず。ならば考えられるのは、代償がいるインチキをしているという事だ。
その強大な一撃は、神々の盾すら貫いた。
「友のために身を滅ぼすか。ああ…君は…君こそは。僕の全力に相応しい!!!」
二人の全力の攻撃は、地を揺らし空を割った。
凄まじい魔力の奔流に、思わず足が後ずさる。
それが収まった時、あの黒い異形は消滅していた。
「動くなよ、英雄王の半身」
俺は泥に埋もれる人影に刃を突きつけながらそう言う。
「心配しなくても、しばらく動けないさ」

少年のような見た目をした英霊は、抵抗する気はなさそうだ。
「イリヤ…」
同じく泥の中から現れた美遊に、イリヤが近づく。
「美遊、わたしね…もう逃げないよ。美遊はわたしの友達だから。友達が苦しんでるなら…もうほっとかない！」
「ほら、帰ろ？わたしたちの家に――」
伸ばした手が、握られる寸前。
「なん……！」
突如降り注いだ雷撃が、全員の体の自由を奪い取る。
「エアで切り裂いた世界の裂け目…まさか…」
「夢幻召喚（インストール）」
現れたのは、人影は即座にカードを夢幻召喚（インストール）した。
「お、お前らは…!!」
忘れもしない、エインズワースの尖兵。あの剣が世界を繋げちまったのか…！。
「お迎えに上がりました、美遊様」
美遊が、連れていかれる。
そんなのはダメだ。俺は何のために、聖杯戦争を勝ち残ったんだ。
立て。
立つんだ、衛宮士郎。
「揺り戻しだ」
世界が揺れる。
ビクンビクンと痙攣し、言うことを聞かない体に鞭を打ち、気合いで立ち上がる。
思わず目をつむりたくなる程の光のなか、それでもかろうじて捉えた美遊の姿に向かって駆け出す。
「待ち、やがれッ!!テメエらッ!!!」
踏み出した右足が、まるで泥の中に嵌まり込んだかのように動かなくなる。
足元を見ると、周囲は明るいはずなのにその光を全て飲み込むかのような、闇が広がっていた。

「やっと…ヤっと、みツけタ――――。セ・ン・パ・イ……！」
「お前、は……!?」
闇の中から現れた手に引きずり込まれ、俺は体も、意識も、その闇の中へと落ちていった。

Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ　ドライ!!編

［第二十六話］交わり始める世界線

～言峰ｓｉｄｅ～

衛宮兄妹が平行世界へと旅立ち、三ヶ月が経った。

時間は何をしてようと過ぎ去るものだ。少なくとも、私はまだ生きてこの冬木の地にいる。

冬木教会と店は既に拠点としては利用していない。エインズワースに知られている以上、工房としてはあまり意味が無い。

今はこの冬木に存在する家を何軒か購入し、簡易的な結界を施し身を隠している。

あのクレーターが発生した事件以来、この街から移住した人間は多い。安値で空き家を買い付けるのは簡単だった。

だが時折、赤毛の少女…彼女の独り言によればベアトリスという名の少女が私を見つけては攻撃を仕掛けてくる。

そのたびに逃走を繰り返し、逃げ切ってはいるがその代償にこの街の至る所は穴だらけだ。既に人は少ないとはいえ、戦いの度に念のため人避けの結界とそれに付随して事後処理を行わなければならないのは非常に面倒くさい。

しかし、逆を言えば襲撃は三ヶ月の間その少女のみ。その襲撃の回数もたまたま見かけたから攻撃した、というような低い頻度のものだ。

工房がある地では、エインズワースは規格外の魔術を行使する。元より、本気で私を殺すつもりならば私の位置を特定が出来ないわけがない。

エインズワース家自体には、本腰を入れてこちらの始末をする気はない。いや、大した脅威ではないと見逃されているだけなのかもしれない。

監視活動は続けているが、あれからのエインズワースは不気味な程

に動きが無い。さしもの彼らも平行世界に逃げられては手も足も出ないか。それとも、手段を探しているのか…。
そしてまだ他にも、懸念点は三つ程ある。
一つは、最近発生している謎の失踪事件。
眉唾ものだとあまり大きな騒ぎにはなっていないが、突如として人間がいなくなる事件が噂になっている。
失踪した人間がいたであろう場所には、魔力の残滓も確認されている。調査のたびにベアトリスに見つかる危険を負うのも面倒だが、仕方あるまい。
２つ目は、保護した間桐桜が姿をくらませた事だ。最期に姿を見たのは、聖杯戦争が決着をむかえ衛宮士郎がこの世界から旅立った事を伝えた時。当面の危険は去った為、自己管理に関しては放任していた。
衛宮士郎の忘れ形見とも言える女だ。失踪事件の折に無事を確認しようと捜したのだが、その姿を再び見る事は無かった。
そして、最期の一つ。ごく最近現れた頭痛の種。
「また来たよ、おじさん。お腹減ったから、何か作ってよ」
幾つもある隠れ家のひとつに戻れば、どこから侵入したのか知らないが不意に現れる金髪の少年。
「ギルガメッシュ…。隠れ家に侵入するのはまだ良いが、結界を人知れず破壊するのは止めてくれともう何回言った？」
「その代わりに僕のモノ（宝具）で結界を張ってるんだから、文句ないでしょ？あと、僕の事はギルって呼んでよ」
「まったく…」
最初はただの少年かとも思ったが、程無くしてこいつが人間でないことには気が付いた。
何より、最初に出会った時にお代は払うから料理を作ってよ、と虚空から黄金を取り出したのだ。
それは見間違えようもなく、私が一度戦ったアーチャーのカードの宝具だった。
なぜ少年の姿なのかは知らないが、本人の言によればカードを

夢幻召喚(インストール)している訳ではなく、少年はギルガメッシュ本人らしい。
敵意も感じなかった為、事を荒立てる必要もなかろうとその時は大人しく料理を振る舞った。
それがいけなかったのか、ここらで食べられる物の中ではおじさんの料理が一番マシだと、ギルガメッシュは殆ど毎日私の隠れ家に来て料理を食している。
我が者顔で居間に居座る少年を尻目に、キッチンへと立つ。
「なんだかんだ準備をしてくれる辺り、おじさんも結構優しいよね」
「昼飯にありつきたければ、少し静かにしていたまえ」
しばらくの間はお互いに無言で、調理の音のみがキッチンに響く。
気が付けば、ギルガメッシュは居間ではなくキッチンの椅子に腰掛けていた。
「ねえ、君は何時まで続けるのかな？」
「…何の話だ」
尋ねられた質問の意図が掴めずに、そう聞き返す。
「おじさんじゃない、君に聞いてるんだ」
ピタリと腕の動きが止まる。……どこまで知っているのか、この少年は。
「皮肉なものだよね。おじさんも君も、幸せになりたかっただけなのに。ただ、普通になりたいが為に苦しんできたのにね」
震える手をもう片方の手で抑え付け、精神を落ち着けようとする。
まさか今更になり、その部分に踏み込んでくる者がいるとは思わなかった。
「君は幸運だった。いや、不幸だったとも言えるのかな？君の中にある魂は確かにひとつなのに、抱えている苦悩や業は二人分。その鍛え抜かれた肉体と精神があるからこそ、君は自己矛盾に耐えられている」
少年は興味深そうにしげしげとこちらを観察していたが、やがてフーッと息を吐き出した。
「思ったより動揺しないんだね」
こちらの反応の薄さに、どこか退屈そうな様子だ。

人の本性を暴き面白がるとは、大した英霊だ。
「私がどのような者か、それは既に嫌と言うほど自覚している。それに……託された思いがあるのでな」
私は既に…理解者を必要としていない。
今はもう、この身に受けた生も、自我も、運命も否定する気は無い。
「ふーん。良縁があったんだね。なんだ、僕の出る幕でもなかったって訳か」
調理に戻ろうかと思った矢先、ズズゥンと外から音が聞こえてきた。
ニコニコと笑顔のギルガメッシュを放っておき、外へ出る準備をする。
「あれ、僕の昼食は?もしかして怒ったの?」
「様子を見てくる。お前が出てくると逆に面倒だ。ここに居ろ」

音のした方へ様子を見に行くと、破壊の痕跡が続いている。
公園から始まり、道路の電柱は折られ車もグシャグシャに潰れている。
その連なる破壊は、恐らくはベアトリスによるものだろう。力任せで、事後処理なぞ頭にも無さそうな所がいかにもそれらしい。
だが、彼女に襲われていた者はどこか?
まさか私をあぶり出そうと、一般人を攻撃したのかと周囲を確認する。
だがベアトリスの姿は見えなかった。
「どど、どうしよう。食べ物なんてどこに行ったら…」
近くにいたのは二人の女のみ。周囲に他の人間の気配は無い。となると、このあうあうと狼狽えている少女と体操服を着た地面に伏している女が襲われてた者なのだろう。
ベアトリスに襲われたのならば、エインズワースの手の者ではないのは明らか。それに、空腹で動けないというのならば、このまま餓死するまで放置するのも寝覚めが悪いというものだろう。

そう判断した私は、声をかけた。
「どうした?行き倒れか?」
食事を提供しようと言えば、渡りに船とばかりに少女は私に付いてきた。特に何をしようという気もさらさら私には無いが、驚くべき警戒心の無さだ。
それに気を失っていた為、今私が背負っている体操服の女。衣服を見る限り攻撃を食らっているはずなのだが、体を改めてもどこにも負傷の痕が無い。
この二人が何者なのか。どこから来たのか。疑問は絶えぬが、ひとまずは飯を食わせてやろう。
やがて隠れ家へとたどり着き、居間の扉を開ける。
「遅いよ、おじさん」
少し腹を立てた様子のギルガメッシュ。
「あ、あなた…どうしてここにッ!」
そのギルガメッシュを見た少女は警戒するように、シュバッと私の背後に隠れた。
「知り合いか、ギルガメッシュ」
ギルガメッシュに目を向ければ、あぁ君か…と彼は小さく呟いた。
「まぁ知り合いと言えばそうかな?ねぇ、イリヤスフィール」
微妙な表情をする少女と、感慨深そうに少女を眺めるギルガメッシュ。
緊迫した空気の中、グーーーと間の抜けた音が無遠慮に響く。
「本当に…おなかがせつないです…」
全員が音の鳴った方、体操服の女を見る。
「何やら禍根があるのは分かったが、取り敢えず昼飯の準備に取り掛かっても良いかね?」
反論を上げるものは、その場にはいなかった。

「何かいいにおいがするです!!」
「ふむ…目覚めたのなら、そのまま待っていたまえ。じきにできる」

ガバリと起き上がった女。体操服の胸の部分には田中と大きく書いてある。
そうして少し経ち、出来上がった料理を皆の前に並べる。
「……赤い。あの…これはいったい…」
料理に箸をつけようとしたようだが、少女の手が止まる。
「麻婆ラーメンだが？」
私の自信作のひとつだ。味に関しては、衛宮士郎にも振る舞い、納得するまで付き合わせたレシピなので問題は何もない。
「私特製の、辛そうで辛くない無駄に赤いラー油をふんだんに使った一品だ。味わうといい」
「ホントに無駄に赤いだけで、おじさんの料理は美味しいよ」
既にギルガメッシュと田中は料理に口をつけている。
「見た目どおりの辛さにすると大抵の者に不評だったのでな。私のものは本当に辛いが、食うか…？」
「え、遠慮しておきます…」
おずおずと料理を口に運んだ少女だったが、食した瞬間にニパーッと笑顔になった。
「美味しいッ！ちょっと辛いけど、あったまる…」
黙々と全員が完食した後、少女が手を上げて発言する。
「あの…ちょっと聞きたいことがあるんですが」
少女がした幾つかの質問は、この街に住んでいるのならば当たり前に知っている事ばかりだった。
「エインズワース家はどこにありますか？」
この質問から察するに、やはりこの少女はこちらの世界の人間らしい。
「なぜエインズワースに関わろうとしているのかは知らんが、立ち入らざる世界だと私は思うがね。特に君のような歳の少女が見るには、あれはあまりに醜悪なものだ」
そう制止の声をかけてみたが、どうやら意思は固いようだ。
「それでも、わたしは救うって決めたから！絶対に、美遊の事を諦めたりなんかしない」

呟いたその言葉を私は聞き逃さなかった。
「美遊…もしや君も、朔月美遊を求める者かね？」
「朔月？、わたしの友達は、衛宮美遊だけど…」
そうか、衛宮美遊か…。
「私の名は言峰綺礼。衛宮の兄妹とは多少の関係があってね」
どうやら、この少女はある程度信用しても良さそうだ。そう判断した私は、衛宮兄妹との五年間の話やこの街で起こった聖杯戦争、エインズワースの情報など多岐に渡って話した。
話を聞いた少女は、色々とありがとうございましたと頭を下げ、席から立ち上がった。
「あの…協力してくれたりはしないんですか？だって、士郎さんと美遊とは五年間も一緒に暮らしてたんでしょう？」
遠慮がちにではあるが、そう聞かれた。
「…無理だな。私が与えれた役割に背こうと、もはやそれを咎める人間もいない。だが、これ以上立ち入れば命の保証が無い。私とて、無為に命を散らすわけにもいかないのでな」
少女は何かを言いかけたが、開きかけた口をギュッと閉じた。
「…分かった。わたし達だけで、なんとかする」
「止めはしない。だが、無策で行けば死ぬことになるぞ」
彼女の意思は尊重する。だが本音を言えば、彼女は行くべきでは無い。敵は、あまり強大な存在なのだ。
「僕も行くよ。エインズワースの工房には僕も用がある」
静観していたギルガメッシュが、立ち上がりそう言う。
「ハイハイ！田中も行きますです！」
……少々、心配が残るメンバーではあるが、取り敢えず玄関まで三人を見送る。
「改めてではあるが、名前を教えてもらえないかな？」
「イリヤ、…イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです」
「確かにその名前、覚えておこう」
エインズワースの工房へと向かった少女達の背中を見送った私は、彼女らの無事を願わずにはいられなかった。

〜言峰side out〜

［第二十七話］エミヤシロウ

あの日、二人で星を見ていた。

「――僕は正しく成ろうとして間違い続けた。間違いを正そうとして際限なく間違いを重ねた。そうして、どうしようもなく行き詰まった果てに、都合の良い奇跡を求めたんだ。見えない月を追いかける…暗闇の夜のような旅路だった――」

それでも、俺は切嗣に救われたんだ。だから正義の味方になりたいと、憧れたんだ。

だから俺は約束した。少年が抱く、夢物語のような理想を。

切嗣との最期の会話の記憶。

しかしどこか、それはいつかの光景とは違った。

中庭の塀の壁際。黒の人影のようなものが立っている。

「正しく成ろうとすることが間違いのはずがない。俺が、間違いになんてさせないからな…!!」

影は音も無く、動作も無く、いつの間にかこちらに近づいている。

その影には、顔が無かった。

「そうだな…それなら、安心だ」

切嗣との会話が途絶えた頃には、影は俺の一寸先にたどり着いていた。

《ウラギルのか？》

「!?」

《お前は、裏切るのか？》

それだけを呟くと、影は最初からそこにいなかったかのように、消え失せていた。

「ここは…」

見開いた目に映る景色は、見慣れた景色。冬木に構えた、衛宮の屋敷の正門だった。

俺は、あの黒い影に飲み込まれて…それから、意識を失って気が付

けばここにいた。
だがここが俺が元いた世界だなんて事はありえない。ここには見覚えのある世界が広がっているが、それらには現実感がまるで無かった。
日食のように暗い太陽。屋敷を覆う黒い影。そして、自分以外に誰も人がいない世界。
いや、自分以外に誰もいないというのは、間違いだ。
目の前に立っている、俺を引きずり込んだこの空間の主。
鎧を纏った人物の顔は兜で見えない。だが、どれだけ変貌を遂げようとも間違うはずは無かった。
その髪飾り、そして彼女の存在を。
「……」
ただ静かに、最初からそこにいたかのように彼女は存在した。
「桜…なんだな？」
「はい、先輩。お久しぶりです…ずっと、会いたかった…」
正直なところ、信じがたかった。信じたくなかった。会いたいと願っていたはずなのに、まさかこんな形で再会することになるなんて…。
「カードを、使ったんだな」
彼女が纏っている威圧感は、かつて幾度となく戦った英霊そのものだ。
「はい、バーサーカーのカードです」
「――今度こそ、そのカードで俺を始末に来たのか？」
新たなカードを手に入れる手段なんて、エインズワース家との繋がり以外に無い。ならば、カードを持っている理由なんて俺を始末する事しか考えられない。
「おかしな先輩…。そんなわけないじゃないですか」
「え…？」
だがその考えはあっさりと否定された。
「先輩の事が大好きだから、私が守ります。あの時、そう言いましたよね？私、強くなったんですよ？この場所には、先輩を傷つけるものは

いない。先輩が苦しまなくてもいい。先輩が戦わなくたって良いんです」
桜の足元から黒い帯のようなモノが現れ、周囲を這い回る。
「だから私とずっと、この空間にいましょう、先輩。あの神父さんに、聖杯戦争の決着は聞きました。もう先輩は、頑張らなくても良いんです」
……彼女を追い込んだのは、俺だ。俺は桜の手をとらなかった。それでも桜は、俺を思ってくれていた。
「それは…出来ない。俺は妹を、美遊を助けるためにこの力を得た。この命の使い道は、とっくに決まってるんだ」
俺には、彼女と共に生きる資格が無い。
視線を落とせば、自身の浅黒くなった腕が目に入る。もはや血すら鉄に変わりつつあるこの体では、いつまで俺が俺でいられるかも分からない。
「――――クスクスクス、クスクスクスクス…」
笑い声につられ、顔を上げる。黒い帯が桜の感情の高ぶりに反応するように、悶え暴れている。
「非道いです先輩。私、ずっと待っていたのに。少し、怒っちゃいました…お仕置きが必要ですね」
膨れ上がる殺気に、俺は反射的に意識を切り替える。
「ッ…!、投影開始(トレース・オン)――――!」
使い慣れた愛剣、干将・莫耶。だが、それを投影した瞬間に双剣は俺の手から離れていた。
「なん…!?」
飛翔した干将・莫耶は、桜の手の中に収まっていた。
「ムダですよ?この空間にいる限り、あらゆる武具は全て私の所有化です」
感覚的に分かる。あの剣は、もはや俺の物では無くなっていた。
「ガッ……!!」
何度投影しても、どんな剣を投影しても結果は一緒だった。そのたびにその全てを奪われて、その刃はただ俺を切り裂く為に使われた。

回避だけに専念しても、桜の夢幻召喚（インストール）しているバーサーカーの方が基本性能が上らしく、なぶるような攻撃で傷は時間が過ぎるごとに増えていく。

鼠をいたぶる猫のように、あるいは羽虫を叩き落とす人間のように。どちらが優位かなんて分かりきった、それはもはや戦いとも呼べないものだった。

限界はすぐに訪れた。不可避の斬撃が迫る。だが、唐突に桜と黒い帯の動きがピタリと治まる。

「攻撃が…止まった？」

「……違ウ」

「ワたしは、こんなことヲ…センパイを傷つける為に強くなっタわけじゃないのにッ!!!!」

「桜……」

彼女は…まだ救われていないんだ。まだ、俺がいなくなった時から、桜は前に進めていない。それでも身に秘めた狂気と抗い戦っている。

苦しんでいる桜を助けたい。俺はそう思った。だが、また俺は誓いを捨てるのか？

切嗣の理想（正義の味方）を捨てて、妹を救うという誓いを立てた。

それを捨てて、また裏切るのか!?

「Ａ――Ａｕｒｒｒｒｒッッ!!!!」

「バーサーカーに呑まれたのかッ!!!!クソッ、桜ッ……!!」

桜の周りを黒い霧がドーム状に包む。一見すると、セイバーとの戦闘時に見た視覚化した濃密な魔力の塊に似ているが、あれはもっと危険なものだ。

あれに踏み込めば、間違いなく取り込まれる。そんな確信めいた警鐘が脳裏に響いている。

どうすればいい？

彼女をなんとか出来るのは、今この場で自分しかいない。だがあの霧に立ち入れば、全てが終わってしまうかもしれない。

焦りを募らせていると、背後から声が聞こえた。

「うん、間近で見ると中々の迫力だね。確かにあれは、良くないモノだ」
「!?」
白いコートを纏った、どこか人間離れした雰囲気の男が振り返った場所には立っていた。
焦っていたとはいえ、確かに人の気配は先程までは無かった。この男は、突然そこに現れたのだ。
敵なのか味方なのか、そう問いたげな俺の視線に気が付いたのか、男は微笑みを顔に貼り付けたまま語りだした。
「怪しい者じゃないよ、私の事は花の魔術師とでも呼んでくれたまえ。…本来なら、この物語(Fate)には干渉する気はなかったんだけどね。君の頑張りようを私は見ていたし、私はハッピーエンドが好きだからね。特別に力を貸そう!」
……正直な感想を言えば、胡散臭い。けれど、今は他に手段が無い。この空間で投影した武具は全て所有権を奪われる。それをなんとかしなければ、桜を救う事は出来ない。
「あの霧をどうにか出来るのか?」
男が歩くたびに、そこには花びらが咲いた。そして、男はその花を手に取って慈しむように眺めている。
「私が生み出す花は、本当にただの花だからね。武具として奪い取る事は出来ないさ。この空間を満たす魔力を消費して花びらに変えてしまえば、君の剣が奪われる事も無いだろう」
さっき、この男は俺の事を見ていたと言った。遠見の魔術か何か、恐らく外の世界とは隔絶された結界内であろうここを覗く事が出来るなど、並大抵の技量の魔術では出来ない事だ。
確たる証拠は無いが、この男は本当に今言った事が可能なのだろう。
「それで、覚悟は決まったかい?」
にこやかに笑ってはいるが、どこかその声はある種の期待に満ちていた。楽しそうで、その傍観者めいた目は既視感のあるものだったから、俺は思わず苦笑してしまった。

「ああ……、簡単な事だったんだ」
俺にとって彼女は…魔術師でもなく、正義の味方でもない。ただの衛宮士郎でいられる場所だったんだ。
俺には桜が必要で、彼女のいない暮らしでは胸の奥底に空いた穴は埋まらなかった。
ならば俺は再び、自らを裏切ろう。
そしてもう一度、この身に誓おう。
「さぁ、いくよッ！」
男は携えていた杖を地面に穿つと、詠唱を初めた。
「星の内海（うちうみ）、物見の台（うてな）。楽園の端から君に聞かせよう……君たちの物語は祝福に満ちていると。罪無き者のみ通るがいい――『永久に閉ざされた理想郷（ガーデン・オブ・アヴァロン）』！」
「これは……」
「今回は特別仕様さ、こっちの方が君らには合っているだろう？」
空間に満ちる魔力は消費され、無害な花びらに変わっていく。
それは大量の桜の花。
昏かった空間に、暖かな陽射しが降り注ぐ。
陽光と幻想的な花弁の親和に、戦いの場だというのに俺は思わず目を奪われてしまった。
「ああ――素敵ですね」
いつの間にか桜を覆い隠していた黒い霧をも、姿を花へ変えて降り注いでいた。
先程までの狂気が嘘のように、桜もその光景に見惚れていた。
「先輩と一緒に見たかった…この一面の…」
彼女の目元はバイザーで隠れているが、その仮面の下に液体が流れ落ちる。
「サクラ吹雪…」
流れているのは、涙だった。
瞳が見えなくとも、桜の言葉から察せられる心情は諦めと悲しみ。
手を伸ばして伸ばして、それでも手に入らなかった物を惜しむ。そんな声だった。

だから俺は、自分に言い聞かせるように、言葉を紡ぐ。
「俺は、桜が好きだ」
俺が守りたいもの、俺にとって大切なもの…。
それをこれ以上泣かせたくないのなら。
覚悟を決めるんだ、衛宮士郎。
「俺は全てを救う正義の味方にはなれなかった。妹を救う為には、君だけの正義の味方になるわけにもいかなかった。そんな半端モノの俺でも、ひとつだけ分かる」
傷ついた体に力を入れ、一歩ずつ前へ足を踏み出す。
「自分の愛した者を守りたいって思う事が、間違いの筈がないんだって…!!」
彼女との出会いが、一緒に過ごした時間が、彼女の笑顔がフラッシュバックする。その全部が、かけがえのない思い出だ。
ただ理想を追い求めるだけの機械のようだった俺が変われたのは、妹(美遊)の影響だけじゃない。桜の、そして俺を支えてくれた人達のおかげだ。感謝の想いが胸を衝く。
ありがとう、切嗣。俺を引き取って育ててくれて。
ありがとう、美遊。こんな俺を、兄と慕ってくれて。
ありがとう、桜。俺を…ただの衛宮士郎に戻してくれて。
桜との距離が近づいていく。
「そんな力に、もう縋らなくて良い…」
投影開始(トレース・オン)――。
投影するはあらゆる魔術を破戒する刃、破戒すべき全ての符(ルールブレイカー)。
これならば、桜の夢幻召喚(インストール)したカードも引き剥がせるはずだ。
「だから……」
この寒い冬を乗り越えて、新しい春になったら……、
「ふたりで…いや、みんなで。桜を見に行こう」
手も触れ合えるようなところまで、既に距離は縮まっていた。
「セ、ン…パイ――」
桜を抱きしめるように、俺は刃を彼女の胸に突き立てた。

［第二十八話］マトウサクラ

～間桐桜ｓｉｄｅ～

ふわふわとした、水の中に浮かんでいるような、そんな曖昧な意識の海に私は漂っていた。

何をしていたんだっけ…？

私の名前は…なんだっけ…？

もう何度この行為を繰り返したんだろう。自分の何かが抜け落ちていって、それを思い出す作業。多分、私はそれを何回も行って、そして忘れている。

きっとそれは大事な事なんだと思う。忘れちゃいけない何かだから、私はこんなに必死になっているんだろう。

だからもう一度。もう一度だけ、思い出そう。

真っ先に思い出したのは、自身がもっと幼かった頃の記憶。

少女はたったひとつ、大切な人から貰った髪紐だけを心の頼りに養子として引き取られた。

うつむき気味に、不安げな表情にきょろきょろと周囲を見回している。

そんな少女を待っていたのは、温かい歓迎なんかでは無かった。

毎日毎日、体中をよく分からない何かに這い回され、ねぶられた。肌を刺して、濡らして、気持ちよくて。

幼い少女の理解を超えた出来事だった。唯一分かった事と言えば、自分は汚されたのだと、本能的に感じた悪寒。

少女は耐える事しか出来なかった。反抗しようなどとは思わなかった。そんな事をすれば、自分への罰が酷くなるだけだろうと。

刻々と過ぎた時間は、着実にその体と心を蝕んだ。気が付いた時には、取り返しがつかない程に壊れていた。

だがそんな日々は突然終わりを迎える。

五年前に起きた聖杯戦争。全てを呑み込んだ、闇。

多くの者が亡くなった。おじいさまも、おじさんも、兄さんも、憧れていた人も誰もいなくなった。
喜べば良かったのだろうか？それとも、悲しめば？
去来した感情は、途轍もない虚無感だけ。
今まで、何のために苦しんだんだろう。その思いだけを胸に、ただ日々を浪費するようにボーッと時間を過ごしていた。
「どうして、世界はこんなに私に優しくないんだろう？」
色褪せた世界の中に閉じ籠もるばかりだった日々。だけどあの日、貴方に出会ったんだ。

日が傾き、紅い夕暮れに世界が包まれる時間。普通の人なら綺麗だと思うのかもしれないけど、少女はまるで裂けた動脈から溢れ出る鮮血のような赤だと思いながら、外を眺めていた。
そんな景色の中、校庭に人影が見えた。
ただ生徒が走り高跳びをしているだけ。なのに、その姿に妙に視線が惹きつけられた。
しばらくその姿を瞳に映していた。何回繰り返しても、その男の子はバーを飛び越える事は出来ていなかった。バーの位置が高すぎるのだ。元より、跳べるはずもない。
だけど彼の目には諦めという感情はなかった。変わらない熱量で、試行し続けていた。
「あ……」
頬に熱いなにかが流れた。
手を伸ばせば、べちゃりとした液体を触る感覚。
「もう涙なんて、枯れたものだと思っていたのに…」
どうして泣いてしまったのか、それは自身にも分からなかった。
ただ、自分が失ったものを彼は持っていて。その純粋さが、羨ましかったのかもしれない。
気が付けば、校舎を出て校庭へと足を踏み入れていた。
泣き腫らした目の赤さは、夕日の紅が隠してくれている。

「あの……」
「ん？君は……」
声をかけられるまで、彼はこちらに気が付く様子がまるで無かった。
「えっと、私…間桐桜と言います…」
「あ、あぁ。俺は、衛宮士郎」
突然声をかけられて、彼は少し困惑しているようだった。
「どうして…、こんな無茶な高さをずっと跳ぼうとしていたんですか？」
問われた彼は、どう答えようかと思案するように頭を掻いた。
「恥ずかしいんだがな…、迷っている事があるんだ。昔からの夢があって、それを叶える為には犠牲にしなきゃいけないものがある。でも、俺にとってはその犠牲にしなきゃいけないものも大切なものなんだ」
「諦めようって…投げ出しちゃおうって、思わなかったんですか？」
何のことかは分からなかったが、顔を見れば分かる。きっと彼にとっては、凄く重要な事なのだろう。
「…結局はどちらかを選ばなきゃいけない。でも無駄な事だって分かってても、俺は諦めたくない。きっと最後の瞬間まで足掻く。走り高跳びは…その願掛けというか、まぁそんな感じだ」
結局跳べてないんだけどな、そう笑った彼から目を離せなかった。
綺麗だと、とても…綺麗な想いだと思った。
「今日はもう帰るよ、桜も日が沈む前に帰るんだぞ」
片付けを始めたその背に声をかける。
「あの！……お疲れ様です、先輩」
振り返った彼は、笑顔を浮かべた。
「ああ。待たな、桜」
そう、私の名前は間桐桜。そして、彼の…先輩の名前は衛宮士郎。
それから、学年が上がった私は先輩と同じ弓道部に所属した。
二人だけしか部員はいなかったけれど、一日一日が楽しかった。
世界が色付くように、何でも無い日常が幸せで、こんな日々がずっ

と続けば良いのにって。
だが、そんな甘い願いが叶う事は無かった。
聖杯戦争がまた始まろうとしていた。私の元に、英霊の力を宿す事の出来る礼装、クラスカードが配られていた。
それだけならばまだ良かった。問題は、聖杯に据えられた器とある少女が五年前に先輩が引き取った、家族同然の存在である事。
それを知った時、先輩が抱えていたものが繋がった気がした。このままでは先輩は間違いなく、聖杯戦争という殺し合いに参加する事になるだろう。
だから私は、先輩が戦わなくていいようにと衛宮邸へと赴いた。
しかし待っていたのは、私にとって残酷な現実だった。
渡されたカードは屑カードで、そして先輩は使えないはずのそのカードで英霊化してしまった。
これが先輩と私の差なのかもしれない。私はカードを使えないと分かった瞬間、生を諦めようとした。
先輩は最後の一瞬まで諦めるなんて事はしなかった。本当に…自分が嫌になる。
戦いに踏み出した彼の背中を見送る事しか、私には出来なかった。
結果、勝者となった先輩は私の手の届かない所へと行ってしまった。

それからは悲惨だった。
ご飯が喉を通らない。何をするにも気力が湧かない。生きているのが辛かった。私が抱えていた想いはこんなにも重かったんだと、自分でも驚いた。
憧憬だけじゃない、尊敬だけでもない。私は……、
「こんなにも先輩が…好きだったんだっ……!!」
いなくなってから、自覚するなんて。どうして、妹を見捨てて自分を選んでくれなかったのか。そんな汚い気持ちが溢れてきて、そしてまた自己嫌悪する。暇な時間があるたびにそんな考えがループして

しまう。
「随分と焦燥しているようだねぇ」
唐突にかけられた言葉に、ゆっくりと振り返る。
「……貴方は」
初めてその姿を捉えた瞬間から、薄気味悪い悪寒を感じていた。目の前の人物が普通の人間で無い事はすぐに分かったが、私には何かを行動する気力も無かった。
「私はダリウス。エインズワースの当主だ」
「なんの用ですか…私にはもう利用価値なんてないでしょう…」
自分は一人前の魔術師なんかではない。先の聖杯戦争で形だけとはいえクラスカードが譲渡されたのは、あくまで私が間桐の家の唯一の後継者だったからだ。
実際、私には多少の魔術の知識があるのみでほとんど魔術の行使は出来ない。
「いやいや、私は謝罪しに来たんだよ。屑カードを渡すなんて、ジュリアンが随分と無粋な事をしたそうだね。そのお詫びとしてはなんだが、屑カードではない本物を君に一枚あげよう」
男は一枚のカードを差し出して来た。見る限りは、バーサーカーのカードだ。
「……バーサーカー。これで自滅しろと?」
ダリウスと名乗った男は、不気味は笑みを浮かべる。
バーサーカーのクラススキルの中には、狂化というものがある。文字通り、使用すればその身は狂気にさらされる事となる。
「そんなつもりでは無いさ。使い方を誤らなければ、君の幸せに貢献してくれる」
それに、これは君の望んでいる力をもたらしてくれるかもしれないじゃないか――――。
……私はそう言われて、カードを突き返す事が出来なかった。

一ヶ月が経ち、二ヶ月が経っても先輩は帰ってこなかった。私はも

う…限界だった。藁にもすがる思いで、カードへと手を伸ばした。
英霊を象徴する武具や防具、それらは宝具と呼ばれている。もしかしたら、このカードの英霊は先輩へと繋がる何かを持っているかもしれない。結局はあの男の思惑通りになってしまっているが、これが今残されているたったひとつの可能性なのだ。
淡い期待を胸に、カードを掲げる。
「夢幻召喚(インストール)……」
確かにこの英霊の力は絶大だった。だけど、それだけ。私が望んでいるような力ではなかった。
しかし私は別の部分で、このカードという物に魅入られてしまう事となる。
「あ……」
時間と共に、少しずつ理性が抜け落ちてくのを感じる。狂化の影響だろう。だがそれは私にとって、甘くて、一度嵌ったら脱出しようとも思わないような、そんな蠱惑的な味わいとなった。
私の心を蝕んでいた後悔や自己嫌悪が色褪せていく。考えなくて済む。思考にも浮かばない。そして残ったのは、重くて大きすぎる先輩への愛情だった。
「Aァァ……♥♥」
こんなのがただの逃避であるのは分かりきっていた。それにこのまま夢幻召喚(インストール)し続ければ、いずれは自分という存在そのものが塗り潰されてしまうだろう。
思考の海に意識が溺れていく。粘ついて、独りよがりな愛情だ。でも、もう苦しい思いをしなくてすむのならこの陶酔の中に浸っているのも良いかもしれないと考えている自分もいた。
それからはただ自らの身体が起こす行動を俯瞰した意識で眺めていた。私の自意識は殻の中に閉じ籠もったまま。
魔術回路が開かれる。この英霊の戦士としての性質の影響を受けたのか、それともカードとは元よりそういうものなのか、カードを夢幻召喚(インストール)し続けた私は自身の魔術の使い方を理解し始めていた。
皮肉にも、私とこのカードは相性が良かった。この英霊の持つ宝具

は、手に取った全ての武具の所有権を奪い取る。そしてそれは間桐の吸収・束縛という魔術特性と必然に親和し、より強大な力となった。
終いには先輩を閉じ込める虚数の檻というべきか、私は世界と隔絶した世界を生み出した。模したのは先輩の屋敷。現実と瓜二つの空間の中で、私は先輩を待ち続けた。
「はやく…先輩帰ってこないかなぁ」
待ち合わせ場所でウキウキそわそわと、愛しい人を待っている少女のような無邪気さ。しかしその根底に根付いた、ヘドロみたいな狂気は誤魔化しようがなかった。
一ヶ月以上もカードを夢幻召喚（インストール）し続け、この空間を維持している。私にそこまでの魔力は無い。つまりは、そう…。
私は……人の魂を、……貪り食った。
後戻り出来ない所まで、私はもう壊れていた。だが壊れきる事も出来ずに、時間ばかりが過ぎていく。例え私が普通の人間に戻れたとして、私は人として生きていけるのか、生きて…いいのだろうか？
でも、死ぬのならせめて先輩の手で殺されたい。そして遂に、先輩をこの空間に連れてくる瞬間が訪れた。

どうして、どうして私は先輩を傷つけているの？
私の視界に映る光景は私の望んだモノじゃない。こんな事の為に、私は強くなった訳じゃない。これは先輩を切り刻む為の力じゃない。でも、手は止まってくれない。身体は止まってくれない。
ダメ…違う…違うッ!!!
狂気に呑まれた身体はもはや止まってくれない。自分の中の大切な何か、最後の防波堤すらも、今まさに壊れようとしている。これは結局は、私の自業自得だ。こんな事になるのなら、もっと早く死んでしまうべきだったんだ。
湧き上がる負の感情に呼応するように、魔力と虚数の霧が私を覆い包む。そう、醜い私を隠して、このまま縊り殺して…。
ギュッと拳を握り込み、最後の瞬間を待った。でもその時、何者か

に引き上げられるように意識が急速に浮上していくのを感じた。夢心地だった意識の感覚が戻り、身体も思うように動かせるようになっている。
私を包んでいた黒い霧が晴れていく。そして視界一杯に広がる、桜の花びら。
「ああ――素敵ですね」
自然と言葉が口をついて出る。
「先輩と一緒に見たかった…この一面の…」
じわりと視界が歪んでいく。
「サクラ吹雪…」
もう戻らない日常を思い、涙は止めどなく流れる。
こんな私でも、先輩は愛してると言ってくれる。私は消えない罪の重さを背負って、この先生きていく事が出来るのだろうか。
最初から、知っていたんだ。先輩は何も諦めない人なんだって。だから、そんな先輩と一緒ならこんな弱い私でも、胸を張って『生きたい』って言える気がしてくる。
差し伸べられた手は暖かで、いつも私を日の当たる場所へ連れて行ってくれる。
「ふたりで…いや、みんなで。桜を見に行こう」
だから……、
「セ、ン…パイ――」
ありがとうございます、先輩。私は返しきれない程の、多くのモノを先輩に貰いました。

「あれ……？」
突然意識が飛んでしまっていた。気が付けば、私は先輩の胸の中にいた。
「気が付いたか、桜。…体は大丈夫か？」
「は、はい……」
先輩に抱きしめられている事にドギマギしながら自分の体を確認

してみる。カードの夢幻召喚（インストール）が解除されている。きっと、先程の短剣の効果なのだろう。
　また助けてもらっちゃったな。でも後悔の言葉よりも伝えたい言葉が私にもあった。
「先輩。私も、先輩が大好きです。先輩がいなければ、生きていようとも思えない程に…」
　少し赤くなった先輩の頬を眺めながら、ニッコリと私は笑う。
「ああ。ありがとう、桜」
　無意識の内に、先輩の手を私は握っていた。先輩も握り返してくれた。きっと、もうこの絆を断つ事は誰にも出来ない。そんな思いと共に私は立ち上がった。
「では、行きましょうか。美遊ちゃんを助けに行くんですよね？」
　朧気ながらに覚えている。今、エインズワース家には美遊ちゃんが囚われている。こちらの世界に先輩が戻ってきたのも、妹を助ける為だろう。
　返事が無かったので不思議に思い先輩の方を振り返ると、なんだか驚いた顔をしていた。
「……強くなったな、桜」
　私はもう一度強く、先輩の手を握る。
「そう思うのならば、それは先輩のおかげです」
　こんな重い女の子を好きになった責任は、キッチリとってもらいますからね！
　そして私たちは、結界の外へと歩み始めた。
～間桐桜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～